

平成29年度 文化庁

「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」

報 告 書

平成30年3月

公益社団法人日本写真家協会

1. はじめに

岩波書店が約10年かけて刊行した豪華本『奈良六大寺大観』と『大和古寺大観』の撮影原板(モノクロ、カラー)約3万6千点が日本写真保存センターに寄託され、保存センターで原板の整理・保存そして利活用することになった。このことは当センターの活動が世の中に認められ、保存・利活用が軌道にのりはじめた証である。

この書籍の刊行にあたっては、美術史家の町田甲一氏をはじめ薬師寺長老の橋本凝胤師らの助言を受け、建築史の太田博太郎東大教授、写真家の渡辺義雄氏を中心とする文化財撮影では定評のある写真家入江泰吉、坂本万七、東京国立博物館の米田太三郎、便利堂の辻本米三郎と奈良の寺社に深いかかわりのある永野太造氏らによって撮られた学術的にも貴重な原板である。その大判の撮影フィルムの総数は約3万6千点と膨大な数量である。こうして出来上がった大観シリーズは、国内だけでなく海外の研究者や史家から高く評価され、わが国の国宝や重要文化財の粋を集成したもので、今日もなお貴重な著書として利用されている。

さらに名取洋之助を編集責任者として岩波書店から発行された『岩波写真文庫』(全286冊)の撮影原板約5万点も寄託を受け、整理保存している。これらは敗戦後の新生ニッポンの復興への息吹や世相を記録した貴重な写真による文庫の原板である。

このように保存センターの活動内容が周知されるようになり、現在構築中のデータベースから閲覧検索して、種々のメディアで利活用されるようになることに期待している。

その広報活動として催した横浜みなとみらいギャラリーでの写真展「後世に遺したい写真」も、保存センターの写真原板の収集保存と利活用をしている現況をたくさんの人々に周知することを目的に行った。写真利用の促進を図るには、データベースの質的量的な充実が必要であり、皆様方の利便性に対する意見も伺いたいと願っている。

田沼 武能(一般社団法人日本写真著作権協会会長)

目 次

1. はじめに	3
2. 本調査の概要	6
2.1. 調査研究テーマ	6
2.2. 調査研究の趣旨	6
2.3. 調査研究の内容	6
2.4. 調査研究計画	6
3. 調査研究の実施計画	7
3.1. 業務題目	7
3.2. 実施期間	7
3.3. 当該年度における業務実施計画	7
4. 業務実施体制	9
4.1. 課題項目別実施期間	9
4.2. 調査研究にあたる諮問・調査委員、補助員、調査員名簿	10
5. 今年度のトピック	11
5.1. 文化財写真の系譜と『奈良六大寺大観』『大和古寺大観』	11
5.2. 岩波写真文庫の意義	13
5.3. 「岩波文化財写真」原板について	15
5.4. 「岩波写真文庫」原板について	16
5.5. 文化庁 国立近現代建築資料館との調査連携	16
5.6. CP ⁺ 2018 写真展・セミナー	20

6. 本年度収集・調査した写真原板について	22
6.1. 本年度の写真原板受入数及び相模原入庫数	22
6.2. 本年度収集・調査した写真原板 総論	23
6.3. 調査した写真原板詳細	25
7. 写真原板データベース	30
7.1. 本年度作業概要	30
7.2. 本年度作業詳細	30
7.3. 写真原板アーカイブの活用とデータベースシステム	32
8. 情報発信・その他	36
8.1. 情報発信	36
8.2. 「日本写真保存センター」大阪セミナー	40
8.3. 「日本写真保存センター」セミナー	42
9. 支援組織	45
9.1. 保存センターと支援組織について	45
9.2. 支援組織の経緯について	45
9.3. 支援組織の支援内容について	46
9.4. 支援組織の概要について	46
10. まとめ	48
図 版	49～52

2. 本調査の概要

2.1. 調査研究テーマ

わが国の文化的、歴史的に貴重な写真原板（フィルム及び乾板等）が散逸、遺棄されつつある現状を防ぐため引き続き、写真原板の収集・調査を行うと同時に、本年度は「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」を行う。

2.2. 調査研究の趣旨

わが国の貴重な文化財を撮影した写真原板の収集・調査と、収蔵写真原板の利活用を行うためのアーカイブの構築を行う。利活用を行うための閲覧・検索用のデータベースの運用を円滑に行うための調査研究を行う。

2.3. 調査研究の内容

アーカイブの構築・運用にあたっての課題を明らかにするため、以下について調査研究を行い、今後の方策を検討する。

2.4. 調査研究計画

① 諮問調査委員会議の実施

調査研究を行うにあたり、写真史、保存技術、権利処理、利活用、アーカイブに関わる専門家による諮問調査委員会議を実施し、当センターの基本理念、具体的な活動方針を諮るための会議を開催する。

なお、データベースの構築および保存技術については、専門家による分科会を設け作業を進める。

② 諮問調査委員会の設置と写真原板の収集保存

調査諮問委員会を立ち上げ、写真原板所有者の元を訪ねて写真原板の収集を図る。

すでに行っている1945年から1970年代の収集、調査に加え、1945年以前の写真原板の収集も行い、わが国の写真史にとって重要な時代や世相をとらえた写真記録にも範囲を広げ、写真内容の厚みを加え、利活用の利便性の向上を図る。

③ 写真原板の収集基準と保存方法

激動した時代の世相を記録した写真原板を重点的に収集する。

収集する写真原板は写真集や印刷物等で公表されたものを優先する。

収集した写真原板はクリーニング、調査を行い完了した原板を中性紙の包材に入替え、長期保存を図るため、相模原のフィルム収蔵庫で保存する。

④ 写真原板の利活用

原板のデータベースを構築するために、近現代史に詳しい人材に依頼し、内容の充実を行う。

データベースの運用にあたっては、著作権等の権利処理を行い、近年とみに課題となっている対象物の肖像権や所有権などの権利についても研究を進め、公正な利活用の指針を構築する。

松本 徳彦（公益社団法人 日本写真家協会副会長）

3. 調査研究の実施計画

3.1. 業務題目

「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」(「写真フィルムの保存・活用に関する調査研究」を含む)

3.2. 実施期間

平成29年4月3日から平成30年3月30日まで。

3.3. 当該年度における業務実施計画

(1) 写真原板の収集調査

写真原板の収集は、前年度から引き続き1945年から1970年代のもの、1945年以前、1970年以降の時代を克明に記録した歴史的文化的に貴重な原板(写真フィルムとガラス乾板等)を対象とする。

これらを撮影した写真家の多くは既に物故されているため、遺族(著作権継承者等)および関係者、機関から取り付ける。

(2) 原板の劣化

わが国は写真原板の長期保存には適していない環境であることはすでに知られている。遺族等のもとから収集した写真原板は、チリや埃をクリーニングし、フィルムの劣化(ビネガーシンドローム)の有無をA-Dストリップ検査試片を使って調べ、レベル0.5以下の原板を、中性紙の包材に交換して収蔵している。

A-Dストリップレベル0.5を超えるものは乾燥した空気のもとで酢酸を飛ばし、保存するかどうかの判定を行う。

(3) 原則寄贈から寄託へと収集範囲を拡大

保存センターが収集する写真原板は、原則寄贈としているが、遺族によっては寄託を望む声もあるところから、重要原板については寄託もやむなしとして受け入れている。

寄託期間は数年程度とし、それ以降は寄贈に切り替えられるよう要望する。

(4) 原板の密着(コンタクトプリント)

収蔵する前に原板は撮影対象が何であるかが判るように、35ミリフィルムでは36枚を1単位として、原板をスキヤニングして、コンタクトプリント(密着)を作成し、画像の内容を確認している。密着からは撮影者が現場でどのような行動をとったか、何を発見しどんな感動を覚えたかの印象を掴み、作家研究や作品の制作過程を研究するために必要な作業である。当センターでは密着は原則非公開であるが、特別な研究者等には保存センター内で閲覧できるようにしている。

(5) アーカイブ構築に向けてのデータベース

平成26年度から整備を進めている検索システム「SAI-CHI」については、収集している写真原板のデータベースの基本は管理用データベース(写真原板台帳)を構築し、これを元に公開用閲覧データベースを作成し、ネット上での閲覧、検索が行えるようにしている。

現在公開用閲覧データベースで閲覧できるコマ数は5,119点である。

(6) 写真原板の利用と広報

今年度はこれまでに収集した原板から、約100点の写真を選び、モノクロプリントを制作した。これを平成30年3月に横浜で催されたフォトイメージングショーCP+に併設された「みなとみらいギャラリー」にて、「後世に遺したい写真」と題する写真展を催した。

これは当写真保存センターが収集調査してきた写真原板の内容を、数万人が集まる写真愛好者や業界関係者に、保存センターの活動実績と保存写真の内容を紹介するもので、入場者は4日間で約7,000名と多く、「写真保存センター」への関心と原板の保存を期待する多くの声が聞かれた。

今後もこうした広報活動を積極的に行い、写真原板の劣化予防対策と保存の重要性をアピールする必要がある。

松本 徳彦(公益社団法人 日本写真家協会副会長)

4. 業務実施体制

4.1. 課題項目別実施期間

	事 項	内 容	備 考
4月	諮問調査委員会議①	平成29年度年間計画	
	支援組織会議①	平成29年度年間計画	
	データベース会議①	平成29年度計画	
5月	調査委員会（調査）	岩波文化財写真原板（岩波書店）	東京
	調査委員会（収集）	岩波文化財写真原板（岩波書店）	東京
	データベース会議②	平成29年度作業詳細	
6月	調査委員会（調査）	渡辺義雄（帝国ホテル）	東京
	写真原板の収蔵作業①	相模原フィルムセンター保存庫へ収蔵	神奈川
	岩波写真原板会議①	整理方針検討	
	調査委員会（収集）	高井潔、岡村崔	東京、静岡
	調査委員会（調査）	渡辺義雄（国立近現代建築資料館）	東京
7月	岩波写真原板会議②	保存・データベース化方針検討	東京
	調査委員会（収集）	ホレス・プリストル、岡村崔、杵島隆	東京
8月	調査委員会（収集）	『岩波写真文庫』写真原板（岩波書店）	東京
	調査委員会（調査）	大橋富夫（国立近現代建築資料館）	東京
	調査委員会（広報）	JPS「文化財写真の保存と利活用に向けて」座談会開催	東京
9月	諮問調査委員会議②	平成29年度上半期報告・下半期の計画	
	支援組織会議②	平成29年度上半期報告・下半期の計画	
10月	調査委員会（広報）	JPS「写真フィルムを長期保存するには…講演と包材のデモンストレーション」セミナー開催	大阪
	調査委員会（収集）	向井潔	東京
11月	調査委員会（広報）	写真学会「写真原板アーカイブ作成の方法」画像保存セミナー招待講演	東京
	調査委員会（調査）	渡辺義雄	東京、新潟
	調査委員会（データベース）	公開用閲覧データベース 公開写真原板追加	
	調査委員会（収集）	常盤とよ子	東京
12月	写真原板の収蔵作業②	相模原フィルムセンター保存庫へ収蔵	神奈川
	調査委員会（収集）	笹本恒子	東京
	データベース会議③	データベース公開方法検討	
1月	諮問調査委員会議③	平成29年度報告・平成30年度の計画	
	調査委員会（収集）	諸河久、山端庸介	東京
	調査委員会（調査）	菊池俊吉	東京
	調査委員会（広報）	展示企画検討（横浜市民ギャラリーあざみ野）	神奈川
2月	調査委員会（広報）	page2018オープンイベント「劣化したフィルムへの対策」セミナー開催	東京
	データベース会議④	データベース平成30年度方針検討	
3月	調査委員会（広報）	CP*2018「後世に遺したい写真」写真展開催	
		CP*2018「過去から未来へのメッセージ-後世に遺したい写真」セミナー開催	神奈川
	権利処理会議	利活用方法検討	
	写真原板の収蔵作業③	相模原フィルムセンター保存庫へ収蔵	神奈川
	報告書作成	平成29年度事業報告	

4.2. 調査研究にあたる諮問・調査委員、補助員、調査員名簿

事業実施体制

公益社団法人日本写真家協会

統括部門

田沼 武能(一般社団法人日本写真著作権協会会長)
熊切 圭介(公益社団法人日本写真家協会会長)
松本 徳彦(公益社団法人日本写真家協会副会長)
山口 勝廣(公益社団法人日本写真家協会専務理事)
瀬尾 太一(一般社団法人日本写真著作権協会常務理事)

諮問・調査委員会

諮問・調査部門

委 員	北村 行夫(虎ノ門総合法律事務所・弁護士)
委 員	金子 隆一(写真史家)
委 員	田良島 哲(東京国立博物館博物館情報課長)
委 員	高橋 則英(日本大学芸術学部次長・写真学科教授)
委 員	吉田 成(東京工芸大学芸術学部教授写真学科主任・同大学院芸術学研究科長)
委 員	白山 眞理(一般財団法人日本カメラ財団調査研究部長)
委 員	多田 亜生(編集者)
委 員	大亀 哲郎(日本ユニ著作権センター企画室主任研究員)
委 員	山口 孝子(東京都写真美術館保存科学専門員)
委 員	丸川 雄三(国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授)
補助員	和田 直樹(公益社団法人日本写真家協会理事)
補助員	小池 汪(公益社団法人日本写真家協会会員)
補助員	内堀 タケシ(公益社団法人日本写真家協会会員)

調査作業部門

調査員	中川 裕美(学芸員 日本大学大学院芸術学研究科映像芸術専攻博士前期課程修了)
調査員	笛木 諭(東京工芸大学大学院芸術学研究科メディアアート専攻博士前期課程修了)
調査員	河原 健一郎(日本大学大学院芸術学研究科映像芸術専攻博士前期課程修了)
調査員	渡邊 英雄(写真研究者)
調査作業員	名阪 沙也子(スキヤニング担当)

事務局長 小泉 洋一

5. 今年度のトピック

5.1. 文化財写真の系譜と『奈良六大寺大観』『大和古寺大観』

5.1.1. 明治時代以来の文化財写真と撮影者

文化財調査と写真技術の間にはきわめて密接な関係があり、初期の日本写真史の顕著な成果の一分野として、文化財写真が含まれることはよく知られている。すなわち、1872(明治5)年に近畿・東海地方の神社、寺院、宮殿を巡った「壬申検査」における横山松三郎撮影の一連の写真、近代的な文化財保護制度確立の前提となった「臨時全国宝物取調」事業における小川一真撮影の写真、写真集『日本精華』に結実した工藤利三郎の写真などである。文化財写真の撮影者の系譜については、2000(平成12)年に開催された東京都写真美術館の特別展「写された国宝」の図録において、岡塚章子氏が多くの作品とともに詳説しており、小文も多くをその成果によっている。

初期の撮影者は横山にしても小川にしても、文化財は彼らが手がけた広範な被写体の一部であり、その仕事は政府や博物館からの委託を受けて行ったものであった。その一方で明治時代後期には東京帝室博物館庶務課に写真室が置かれ、自ら文化財写真を撮影する体制を整えている。東京国立博物館には大型の乾板用の撮影機材が現存しており、また遅くとも大正時代後半には写真撮影を専門とする職員が在任していたとみられる。このように組織に属し、業務として画像情報を記録する撮影者をかりに「写真技師」と呼ぶならば、第二次大戦前にはすでに、文化財を専門とする「写真技師」が存在していた。写真技師の撮影する写真には芸術写真と異なって、被写体を含む情報を過不足なく記録する客観性と正確さが求められた。

5.1.2. 『大観』収載写真の性格

書籍としての『奈良六大寺大観』『大和古寺大観』(以下総称として『大観』という)が特徴的なのは、商業出版物の形をとっているが、実質的に各寺院が所蔵する国宝・重要文化財の公式調査報告書の意味合いが強いことである。それは各文化財に付された解説の執筆者の顔ぶれを見れば明らかで、たとえば『奈良六大寺大観』で見ると建造物、仏像彫刻、絵画の執筆分担は以下のとおりとなっている。

- 建造物：太田博太郎(東京大学) 岡田英男・鈴木嘉吉・伊藤延男(奈良国立文化財研究所)
- 仏像彫刻：町田甲一(東京教育大) 倉田文作・西川新次(文化庁・東京国立博物館)
田辺三郎助・西川杏太郎(文化庁) 井上正(京都国立博物館) 水野敬三郎(東京国立博物館)
- 絵画：濱田隆・真保亨(文化庁)

建造物、美術工芸品のそれぞれの分野の元締めは太田博太郎や町田甲一のような大学の研究者が務めているが、調査と執筆の実働部隊は当時の文化庁の調査官や国立博物館、文化財研究所の研究員が大半を担っており、撮影に当たってもどのような写真が必要であるかの判断を行っていたと考えられる。

実は、参加した撮影者たちにも同じような性格の者が見られる。『奈良六大寺大観』に撮影者として明示されているのは次の人々である。

渡辺義雄 辻本米三郎 平尾行夫 渡辺衆芳 米田太三郎 坂本万七 矢沢邑一 八幡扶桑 蘭部澄
入江泰吉 永野太造 佃幹雄

現代写真史の視点からは、渡辺義雄や入江のような独立した職業写真家が注目されるだろうが、この中のかなりの人々が「写真技師」あるいは写真技師的な性格をもった写真家であったことは強調されてよい。公刊資料からわかる一部の人々の仕事を簡単に記しておく。

●坂本万七

坂本万七は、舞台写真家・文化財写真家として著名であるが、すでに1930年代には建築史家関野貞とその弟子竹島卓一とともに中国大陸の文化財撮影に従事しており、清朝の離宮を撮影した『熱河』などが知られている。戦後は美術研究所で東京国立博物館所蔵の法隆寺献納宝物の撮影にも携わった経験がある。

●米田太三郎

米田は奈良の出身で、飛鳥園主小川晴暘に師事した後、1939(昭和14)年に東京帝室博物館学芸課に写真撮影担当の職員として採用され、大戦後は1973(昭和48)年まで東京国立博物館に勤務し、写真室長となった。『大観』編纂当時は在任中である。

●矢沢邑一

矢沢は飛鳥園の出身だが、大戦後、奈良国立博物館に写真技師として勤務した。『大観』編纂当時は在任中であろう。

●渡辺衆芳

渡辺は、1955(昭和30)年に奈良国立文化財研究所に採用された最初の写真技師で、それ以前から地元の美術史家寺尾勇のもとで、文化財の撮影を手がけていた。佃幹雄、八幡扶桑の二人も奈良国立文化財研究所の職員で、長年文化財撮影に従事している。



図1 入江泰吉
「中宮寺 弥勒菩薩半跏思惟像(斜)」



図2 辻本米三郎「興福寺 銅造仏頭」

さらに、辻本米三郎は便利堂に所属し、戦前の法隆寺金堂壁画の撮影や正倉院宝物の撮影に長く携わっていたことは、周知である。『大観』写真の撮影者は文化財を長く手がけてきた、芸術的な写真を撮影していた写真家(図1)と、公的機関に所属し、あるいは資料的な文化財写真の撮影経験のある、文化財情報の記録者としての性格を強く持った人々(図2)とが含まれていた。

このように『大観』は、第二次世界大戦後に活躍した多くの文化財写真の専門家が官民双方から結集し、同時に研究所、博物館、大学に所属する当時第一線の美術史研究者が調査と解説執筆に携わった点で、きわめて公的性格の強い事業と評価することができる。

この時期、文化財図録を公的機関が監修して調査研究の成果を提供し、出版は民間で行うという形態は『大観』に限らない。『奈良六大寺大観』に先立つ1963(昭和38)年から67(昭和42)年にかけて刊行された毎日新聞社『国宝』全6冊は、文化財保護委員会(文化庁の前身)の監修になり、撮影者には入江泰吉、佐藤辰三、藤本四八、米田太三郎、渡辺義雄、日本写真印刷、大塚巧芸社がクレジットされている。また、正倉院宝物は、やはり正倉院事務所編『正倉院宝物』のシリーズが1960(昭和35)年から64(昭和39)年にかけて朝日新聞社によって刊行され、撮影は便利堂が行っている。

参考文献

- ・米田太三郎「無事故撮影の三十数年」, 毎日新聞社『国宝』5 付録, 1966年
- ・『東京国立博物館百年史』, 1972年
- ・『写された国宝—日本における文化財写真の系譜—』(東京都写真美術館特別展図録), 2000年
- ・奈良文化財研究所飛鳥資料館『平成28年度春季特別展 文化財を撮る—写真が遺す歴史』, 2016年
- ・『便利堂創業130周年記念出版 時を超えた伝統の技』, 2017年
- ・東京文化財研究所 物故者記事データベース <http://www.tobunken.go.jp/materials/bukko>

田良島 哲(東京国立博物館博物館情報課長)

5.2. 岩波写真文庫の意義

はじめに

赤瀬川原平が「戦後の空気の貴重な貯蔵庫」と評した岩波写真文庫は、1950年6月に『木綿』『昆虫』『南太平洋の捕鯨』『魚の市場』『アメリカ人』の6冊で刊行が開始され、1958年12月までの間に全286冊が刊行された。その総体は「目で見える百科事典」と言ってよいほど、多岐にわたるテーマが視覚的に展開されている。今回寄託される約50,000点の原板は、1950年代を通して記録された日本人の「知」の集積であると言って過言ではないだろう。

岩波写真文庫は、まだ戦後の動乱が様々な領域に残っていた1949年の夏、岩波書店専務取締役(当時)に就任した小林勇の発案によるものである。小林は、戦後における出版社経営には文字だけではなく、視聴覚を取り入れたものが必要であり、それこそが新しい戦後の文化を創造するものであると考えたのであった。そのために小林は、雪の研究者として優れた科学映画を制作していた中谷宇吉郎の勧めで、映画製作プロダクションを発足させていたが、それだけでは採算が取れないと判断して、紙媒体つまり写真をベースにした出版企画を発案する。それが岩波写真文庫であった。そしてその企画制作にあたって白羽の矢を立てたのが名取洋之助であった。

名取洋之助と報道写真

名取洋之助は、ドイツで報道写真の実際を身に付けて帰国、1930年代の日本に「報道写真」という新しい写真の潮流を作り出した。それは、新聞のニュース写真とは異なり、複数の写真を組み合わせ一つのストーリーを創造してメッセージとするものであった。この「報道写真」は、写真の機械性に覚醒することによって展開した近代写真のなかにあつて、メディアとしての写真の可能性を切り開くものであった。機械の眼(カメラとレンズ)によって切り開かれた新しい視覚性によって得られた写真を、ある方向性をもって組み合わせグラフィックにデザインし、それを大量に印刷して世界のあらゆる人々の手元にもたらすという「報道写真」というかたちは、写真だけがもたらす機能性を実践するものであった。

名取によってもたらされた「報道写真」というイデオロムは、戦争の時代へと向かってゆく1930年代後半の日本にあつて、対外宣伝、国策宣伝の重要な方法として高度に発展してゆくのであった。対外文化宣伝グラフ雑誌『NIPPON』(1934年創刊)は名取自身による実践であり、国内向けの国策宣伝グラフ雑誌『写真週報』(1938年創刊)は、その影響と展開を現している。そして悲慘な総力戦の中でプロパガンダと化し、1945年の敗戦による占領という新たな現実とは、これまでの「報道写真」を壊滅させたと言ってよいだろう。

しかし1946年、中国から帰還した名取洋之助はこの「戦後」という未曾有の現実を、国策から自由な新しいメディアを作るチャンスととらえ、「日本のライフ」を目ざして『週刊サンニュース』を創刊(1947~48年)する。しかし名取が実践した大判のグラフ雑誌は、当時の日本の大衆には受け入れられず、経営的に破綻してしまう。そのようなときに岩波書店の小林勇と出会うのであった。

岩波写真文庫の構成

岩波写真文庫は、名取洋之助にとっては戦争によって奪われた「報道写真」の自由を実現するものであった。そして発案者の小林勇にとっては、1953年に始まるテレビ放送に象徴される新しい視覚メディアの時代を先取りするものであった。

1950年6月に6冊で創刊された岩波写真文庫は、その後は月3冊をめどに刊行が始まってゆく。発売と同時に広く読者を獲得し、特に『鎌倉』(No.12)や『いかるがの里』(No.17)は、ベストセラーとなり、これをガイドブック替わりに観光スポットを散策する姿が評判となった。そして1953年、菊池寛賞を受賞は、岩波写真文庫が新しい時代のメディアとして確たる評価を得たことを証明するものであった。

その構成内容を一言で語ることは困難であるが、いくつかの系列を見てとることはできよう。いわゆる自然科学に関するテーマをもつものとしては『蝶の一生』(No.11)、『力と運動—目で見た力学』(No.28)、『星と宇宙』(No.36)、『シャボテン—環境と植物』(No.81)、『貝の生態』(No.126)などが、社会的なものとしては『電話』(No.34)、『郵便切手』(No.83)、『自動車の話』(No.94)、『水害と日本人』(No.124)、『忘れられた島』(No.148)、『塩の話』(No.193)などが、美術的なものとして『様式の歴史—西洋美術』(No.23)、『近代藝術』(No.78)、『システナ礼拝堂』(No.97)、『伴大納言絵詞』(No.128)、『山水画—中国』(No.226)などが、歴史的なものとしては『金印の出た土地—北九州の歴史』(No.46)、『広島—戦争と都市』(No.72)、『戦争と日本人』(No.101)、『悲惨な歴史—ドイツ』(No.185)などが、そして地誌的なもの——これがもっとも数が多い——として『長崎』(No.38)、『東京案内』(No.68)、『飛騨・高山』(No.106)、『伊豆半島』(No.138)、『函館』(No.151)などがある。その中でも特に目立つものとして、1954年に制作が開始された「新風土記」シリーズがある。『山形県—新風土記』(No.134)で始まった、いわば「県別写真文庫」ともいべきこのシリーズは、『沖縄』(No.285)を含み、1950年代後半の日本を横断的にとらえたものとして特筆されるものである。

岩波写真文庫の写真家たち

1949年、岩波写真文庫を制作は岩波映画製作所の中に位置づけられ、スタッフ・カメラマンには、名取洋之助が創刊した『週刊サンニクス』のスタッフ・カメラマンが参加する。その中心は、本来は写真家志望であったが、『週刊サンニクス』時代は編集者として名取に鍛えられた長野重一を中心に、木村茂、蘭部澄、細井三平ら同誌の残党が加わり、さらに長野の友人で土門拳が主唱したリアリズム写真運動の優等生であった織田浩も参加している。また名取が岩波写真文庫の編集長の座を離れ、外部スタッフとしてあった1964年にスタッフとなった写真家に東松照明がいる。また藤本四八、三木淳、木村伊兵衛といったフリーランスの写真家たちも仕事をしている。さらに写真家ではなく研究者による写真も数多く使われている。民族学者泉靖一、梅棹忠夫、植物学者武田久吉らの写真が使われている。さらに興味深いものに、地方在住で「草の根ドキュメント」ともいべき写真を撮影していたアマチュア写真家——小学校教師の熊谷元一、積雪研究所員の高橋喜平、農協組合長の井上一郎など——を積極的に発掘し起用していったことは注目されよう。

名取自身の写真も1937～38年にアメリカを取材したときのものや、1956年に中国で撮影した写真が使われている。

岩波写真文庫の写真

岩波写真文庫は、新書判よりひとまわり大きいB6判64ページであるにも関わらずその中に140～150枚もの写真を、解説テキストと写真のキャプションをあわせて約2万字近くの文字が、ぎっしりと端正にレイアウトされ、総アート紙で印刷は写真網目版である。大きく見開きで使われる象徴的な一枚写真と小さく分析的にコマ割りするかのようないレイアウトを組み合わせたページの展開は、名取洋之助が主張した「写真は文字と同様、記号である」という写真論を実際にみせるものでもあったと言えよう。そして岩波写真文庫286冊の中で展開された多様なテーマは、「写真

はあらゆる表現できる」ということを証明するものである。ただしそれは決して一枚の写真が独立して積み重なったものではなく、「報道写真」のイディオムが作り出した「写真を組み合わせる」ことによってはじめて可能となるものであった。

名取によれば、一冊の岩波写真文庫を制作するには、そのテーマを語るための構成に従って約6,000枚の写真を集めてきて、その中から500枚くらいを選ぶ。それをもとに具体的な構成・展開を考えながら何度も試行錯誤を繰り返し、写真のページごとのレイアウトを決め、最後にキャプションを書き加え、完成へと持って行ったという。

今回寄託される岩波写真文庫の原板は、このような具体的にあるテーマを語るために撮り下ろされた写真が中心にあるということはきわめて重要である。新聞社のニュース写真が日々おきた出来事を追いかけて撮影された写真であるのに対して、岩波写真文庫の原板群は、あらかじめ立てられたテーマに従って様々な角度から総合的にアプローチした結果であるのだ。つまり時代の中で今われわれが知らなくてはならないこと、また知りたいことを、意識的に集積した写真の原板であるということなのだ。

終わりに

今あらためて岩波写真文庫の写真を通覧すると、1950年代を通して戦後復興を遂げてゆく日本の現実を記録したところがまず目に入ってくるだろう。だが岩波写真文庫という総体は、日本人が何をどう考えていたかをするための稀有な文化資料であると言わなくてはならない。なぜならば、ここに集積された原板は、日常の生活の中で撮影されたものではないからである。日常の生活の中からの眼による写真は、現在、博物館・郷土資料館などを中心に、地域映像アーカイブの名の下で収集・保存・利活用が始まっている。そのような写真が重要なのは言うまでもない。それに対して岩波写真文庫の写真は、プロフェッショナルな写真家——これは写真撮影技術ということだけではなく、研究者というプロフェッショナルな眼も含まれる——によって撮影されたものである。さらに名取洋之助を中心とするプロフェッショナルな編集者が一冊の本を作るために撮影された集積でもあるのだ。そこには、ばらばら個別な目的とアプローチをもって撮影されている「地域映像」とは、根本的に異なる位相が形成されているのだ。それは、まさに1950年代において日本人の「知」のありようがどのようなものであり、その「知」は21世紀の私たちにどのような可能性をもってあるのかを問いかけるものではないだろうか。

金子 隆一 (写真史家)

5.3. 「岩波文化財写真」原板について

2016(平成28)年12月、公益社団法人日本写真家協会と株式会社岩波書店との間に交わされた「文化財写真の寄託」にかかわる合意に基づき、2017(平成29)年5月に当該写真原板および付帯資料一式が株式会社岩波書店から公益社団法人日本写真家協会に寄託された。

この経緯については、1965(昭和40)年に奈良の六大寺、すなわち東大寺、法隆寺、興福寺、唐招提寺、薬師寺、西大寺の管長・長老の集まりである南都隣山会の発意が淵源となり、各寺に伝承される古美術・古建築などの指定文化財すべてを厳密精細に写真記録する事業が株式会社岩波書店に委嘱された。第一線の写真家と美術史家・建築史家の参加を得て大観刊行会が組織され、徹底的な写真撮影と実地調査の研究成果を踏まえた『奈良六大寺大観』(全14巻)の刊行に至った。この事業にかかわられた写真家として渡辺義雄、入江泰吉、辻本米三郎、米田太三郎、永野太三郎、藺部澄などがおり、研究者として太田博太郎、鈴木嘉吉、倉田文作、西川新次、町田甲一、水野敬三郎の諸氏がいる。この事業の継続を可能ならしめたのは、ひとえに文化庁、奈良文化財研究所、美術院国宝修理所など関係諸機関の全面的な協力があったからである。

この大観方式による文化財の徹底撮影と悉皆調査は『奈良六大寺大観』に引き続いて、奈良を中心とする旧大和地方に散在する當麻寺、秋篠寺、中宮寺、室生寺など21ヵ寺を対象とする『大和古寺大観』(全7巻)へと展開し、

さらに『平等院大観』(全3巻)、『醍醐寺大観』(全3巻)へと継承された。最終的に完結したのは2002(平成14)年、当初からするとほぼ40年がかりの大規模プロジェクトとなった。その成果としての写真原板、すなわち大型カメラによるカラー・ポジ約8,000点、モノクローム約28,000点の合計約36,000点が今般株式会社岩波書店から公益社団法人日本写真家協会に寄託された。

多田 亜生(編集者)

5.4. 「岩波写真文庫」原板について

『岩波写真文庫』は1950(昭和25)年から1958(昭和33)年にかけて、株式会社岩波書店から刊行された全286冊のシリーズである。「物語る写真」という新しいスローガンをかかげて、自然および社会に存在し生起する事象を可能な限り写真表現でとらえて出版することをめざし、また新しい時代の視覚教育の要望にも応えるべく、多くの研究者・専門家の協力をえて企画実現したものである。

株式会社岩波書店は株式会社岩波映画製作所と協議して企画立案をし、株式会社岩波映画製作所が写真撮影にあたり、株式会社岩波書店が編集・出版するという形式をとった。撮影には名取洋之助をはじめ長野重一、藺部澄、東松照明などの株式会社岩波映画製作所スタッフがあたり、また地方在住の写真家の協力や、外部の研究機関などからの写真提供もあった。撮影されあるいは提供された写真原板は膨大であるが、これを株式会社岩波映画製作所が所蔵・管理し、そのごく一部が写真プリントされ、出版原稿として株式会社岩波書店が所蔵・管理した。このプロジェクトは時宜にかなった出版として大成功をおさめたものである。

そして写真著作権は撮影者たる株式会社岩波映画製作所に、編集著作権は株式会社岩波書店に帰属した。ところが時代状況は、学術的なテーマを追求する映像事業の存続を困難ならしめ、1998(平成10)年、株式会社岩波映画製作所は業務終息という事態に陥った。膨大な映画フィルムや写真の原板管理については、岩波映像株式会社が引き継いだ。2000(平成12)年、これら貴重な映像資料の散逸を回避することもあり、株式会社日立製作所が映画・写真原板などを一括して取得し新たな事業展開をはかった。しかし、『岩波写真文庫』については、著作権法上や商標法上あるいは商慣習からして株式会社日立製作所としてのビジネス展開をすることが困難であることが判明し、株式会社日立製作所の要請により、2004(平成16)年に株式会社岩波書店は「岩波写真文庫」写真原板の所有権を取得することになった。

今般、2017(平成29)年8月、公益社団法人日本写真家協会に寄託された「岩波写真文庫」写真原板はガラス乾板、手札判、4×5インチ判、ブローニー判、ライカ判などで、総数ほぼ50,000件におよぶ。同時にフィルム台帳、コンタクト密着アルバム、刊行書籍などの付帯資料一式がともに寄託された。

多田 亜生(編集者)

5.5. 文化庁 国立近現代建築資料館との調査連携

5.5.1. 調査連携の目的

全国各地にある美術館、博物館、公文書館、図書館、郷土資料館などでは、各機関の主な収蔵資料の他に、しばしば地元の郷土史家や研究者から寄贈された貴重な写真原板が収蔵されている。日本写真保存センター(以下保存センター)では「我が国の写真原板全般」を劣化の危機から救い、保存・活用する方法を模索している。そのため保存センターが収集した写真原板だけではなく、他機関が所蔵する写真原板の保存と活用のための協力も保存センターにとって重要な活動である。

本年度は、他機関での有効な写真原板の保存・活用を目的として、渡辺義雄が撮影を行った東京文化会館竣工

写真の写真原板（以下「東京文化会館写真原板」）受け入れ〔6.3.2.で詳述〕を機に、文化庁国立近現代建築資料館（以下、建築資料館）と「東京文化会館写真原板」について調査連携を行った。

5.5.2. 渡辺義雄撮影「東京文化会館写真原板」の意義

東京文化会館は、近代建築の巨匠、ル・コルビュジエに師事した前川國男^{*1}によって設計された、代表的な日本近代建築の一つである。渡辺義雄は美術評論家、板垣鷹穂から建築家、堀口捨己に紹介されたことをきっかけに建築写真の撮影を始め、前川國男設計の建築も第二次世界大戦前から数多く撮影した。

「東京文化会館写真原板」は、渡辺義雄が撮影した写真作品としての価値を持つと同時に、竣工した建築物の全体を捉えた精密な記録である。「東京文化会館写真原板」を最初に渡辺義雄の遺族から預かった京都工芸繊維大学教授松隈洋は、建築研究にとっての写真資料の意義について以下のように指摘している。^{*2}

…図面やスケッチだけでは、その建築についての情報は建築の誕生以前に限られる。文字どおり構想された設計内容を伝えるにとどまる。けれども建築の全体像を理解するためには、その建築がどのようにできあがったのか、そしてどのように生きられたのかを知る必要がある。そのためには建築写真が欠かせない。また建築写真には、建築の誕生の瞬間が時代とともに映しこまれており、仮に現存するものであっても、現在までに加えられた変更や周辺環境の移り変わりが記録されている。それは時間のなかにおける建築の意味を考えるうえで新たな可能性を秘めた素材でもあるのだと思う。

このように「東京文化会館写真原板」は、竣工された建築の全体像を理解するために欠かせない資料であると共に、竣工後、時間がたった後での建築の意味、つまり建築の歴史的意味を考える上でも欠かせない資料である点で、写真原板アーカイブにとって価値があるだけでなく建築アーカイブにとっても意義が深い資料である。

5.5.3. 調査連携の方法

「東京文化会館写真原板」の調査連携の方法については、所在が明らかになった昨年度、建築資料館に関係者が集まり検討した。結論として、写真原板を適切に保存・活用するため「東京文化会館写真原板」は、建築資料館が撮影された被写体内容の情報を専門的な視点から記入し、保存センターで受け入れ、適切な保存と整理を行うこととした。この方針に基づき、本年度は建築資料館と保存センターで連携して初期概要調査を行った。

具体的には、まず建築資料館で、資料への番号づけ、被写体内容についての専門的理解が必要な情報記入を行った。その際は、保存センターで使用しているメタデータ項目と同じ項目、特に「被写体記述」、「解説」、「包材記載内容」などへ情報を記入した。次に、写真原板そのものの情報（フィルムメーカー、フィルムフォーマットなど）や、権利情報、劣化状態などについて、保存センターで情報を記入した。

表1 建築資料館で記入したメタデータの例（ホルダー）

建築資料館 による番号	被写体記述 （建築物）	被写体記述 （建築家名）	包材記載内容	解説	撮影者
3	東京文化会館	前川國男	東京文化会館 #01 内部 大ホール ホワイエ（建築.6） 誌上ネガ含 36.4月	東京文化会館は、開都500年記念事業として上野公園内に建設された、日本で最初の本格的な音楽ホール。1961年3月竣工。構造：木村俊彦、音響：石井聖光、壁面彫刻：向井良吉、設計チーフ：大高正人。（編集集中）	渡辺義雄 〔渡辺一雄氏 保管資料〕

また、写真原板の劣化対策と保存方法、写真プリントおよび写真画像データ作成方法などについては、保存センターから建築資料館へ情報を提供した。

建築資料館でのメタデータ記入の際は、将来保存センターのデータベースへ情報を格納するため、保存センターで行っている情報整理方法と同じ「写真家」、「ホルダー」、「コマ」の3階層の番号付けを行い(図3)、メタデータは保存センターと同じ項目で記入した。担当者間では、ISAD^{*3}のフォンド、ファイル、アイテムの概念(図4)を援用し、フォンド(資料群)は写真家、ファイル(資料グループ)はホルダー、アイテム(資料の最小単位)はコマ画像と考えて情報を記入するよう、記述レベルについての認識を共有した。

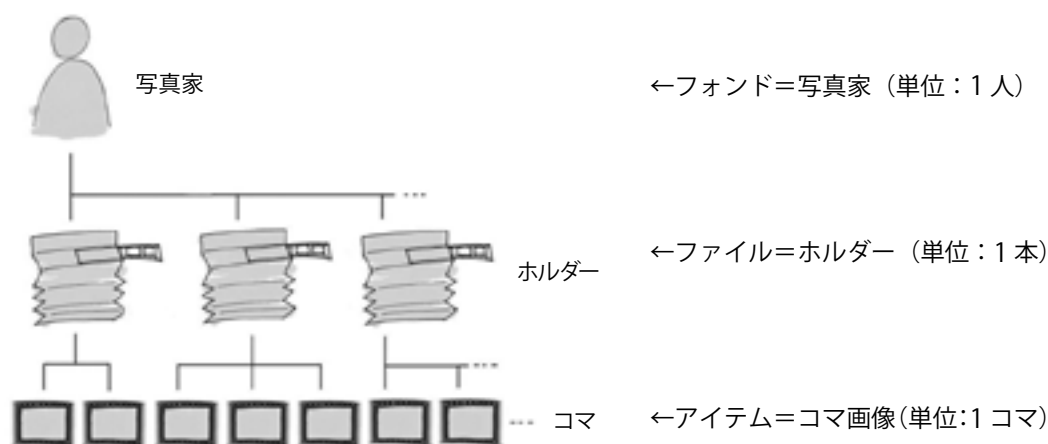


図3 保存センターデータベースの情報構造の概念図

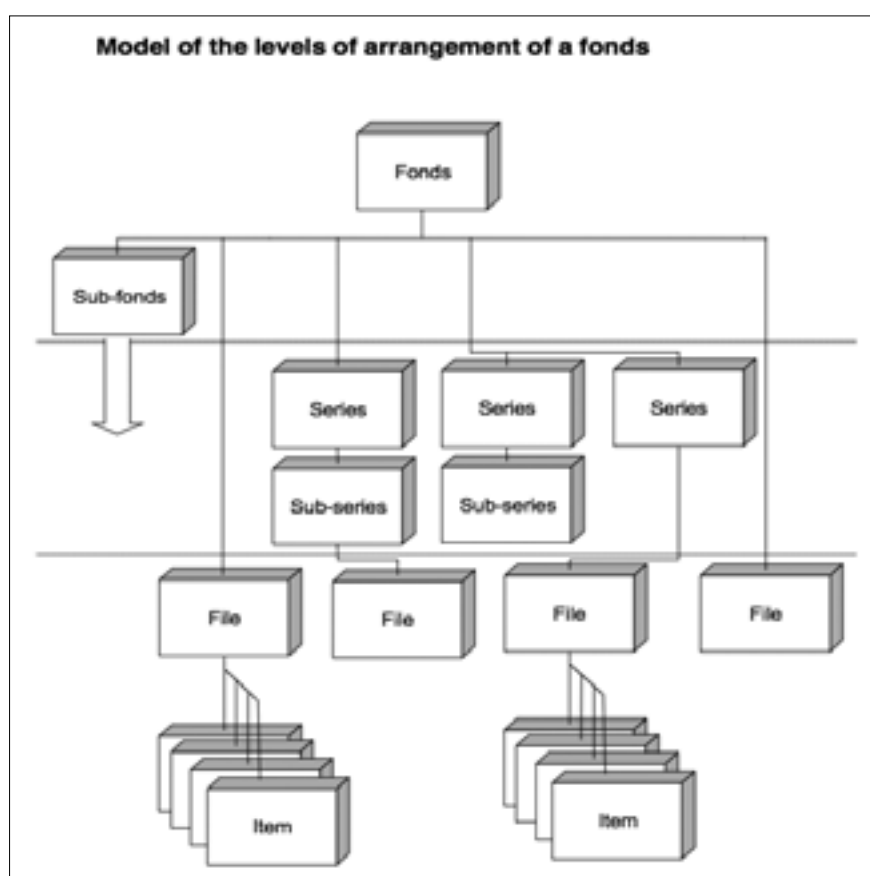


図4 ISADによるフォンド整理レベルの概念図

2000, ISAD (G), *General International Standard Archival Description* (2nd ed.), p.36

調査過程では、建築資料館側からホルダーをまとめた、中袋、小箱などの扱いはどうするか、との質問が保存センターへあった。これらは、フォンド概念でいえば、サブフォンド、シリーズの階層の情報としてあつかうことも可能な情報である。だが、写真原板でサブフォンド、シリーズにあたる階層を作ることになると、入っていた箱、展覧会、写真集、撮影シリーズ、など写真家によって極めて多様な階層分けが可能になってしまい、すべての写真家にあてはまる階層構造を作成することは難しい。そのため、保存センターでは、サブフォンドなどの階層を作成した情報整理は行っていない。そこで「東京文化会館写真原板」の情報記入の際は、保存センターのデータベースへ登録できるようにするため、サブフォンド、シリーズの目録は作成せず、小袋がある場合は該当するホルダーの目録に情報を記入することとした。

また、連携の一環として、建築資料館が「東京文化会館写真原板」から写真プリントを作成する際は、保存センターがオリジナルプリントに近い形になるようにプリント制作を監修した。

5.5.4. まとめ

今回の調査連携により、保存センター内での調査では適切な記入を行うことが難しい建築物の建築史上の位置づけや、撮影された被写体の名称などの専門的な記述メタデータを得ることができた。更に、専門家による読み取りが有効だったのは、「包材記載内容」、つまりネガカバーなどの包材に書かれた文字情報についての読み取りで、今回の調査では、建築資料館によって、癖字のメモや、読み取りづらい書き込みなども、被写体のコンテキストに即して、適切な読み取りが行われた。

写真原板を有効に活用するためには、物理的に安全に保存するだけでなく、資料が備え持つ情報を適切に整理し、メタデータを与えなければならない。しかし、写真原板は、人物、事件、建築、広告、研究資料など極めて多様な被写体を記録した資料である。そのため、保存センターの調査員がすべての写真原板の被写体について専門的な情報記入を行うことは難しく、この点がこれまでの調査でも課題となっていた。これは、保存センターだけの特殊な問題とは言えず、写真原板のアーカイブ化には必ずついてまわる問題であった。

一方、資料館、図書館、博物館、美術館、文書館などの専門機関では、写真原板の被写体内容については深い知見を持つ職員はいるが、専門の職員が写真原板そのものの物理的保存、構造的な情報整理などを行っている機関は少ない。専門機関にとって、写真原板は第一義的に収集・整理する資料ではなく参考資料であるため、写真原板のアーカイブ化には力を割けず、曖昧に放置せざるを得ないことが多い。

このような状況で、被写体内容の専門的な情報については専門機関が記入し、保存センターが写真原板の保存・整理を受け持つ、という形の今回の調査方法は、保存センターと他機関との連携方法の一つとして有効であることがわかった。

更に、今回の調査連携で見えてきたことは、建築資料と写真関係資料の近現代資料としての類似性である。建築資料と写真関係資料は、いずれも設計図、ラフスケッチ、写真フィルム、コンタクト(密着)、メモなどの最終的な表現物(建築物、写真プリント)に至るまでの中間生成物が膨大にあり、複製(コピー、印刷物)も多い。これら近現代資料は、カタログ・レゾネのような既に定まった目録整理方法がある「絵画」などの美術作品や、アーカイブ化の伝統がある「公文書」と異なり、保存されるべきものであるという一般通念が十分に成熟していない。そのため、これらの資料は、比較的近い過去の資料でありながら、写真原板同様に劣化、散逸の危機に瀕している。

このように共通する問題を抱える専門機関、特に近現代資料の専門機関との調査連携、意見交換は、相互の調査に有益であることが今回の連携で判明した。

*本調査では文化庁長官官房政策課国立近現代建築資料館副館長、橋本祥介氏に特段のご配慮をいただいた。また、情報記入他の実作業では研究補佐員、藤本貴子氏に多大なご協力をいただいた。ここに御礼申し上げます。

※1：前川國男（1905年～1986年）建築家。戦前・戦後を通じて日本近代建築の第一人者として日本建築界を牽引した。東京文化会館は1961年（昭和36年）に竣工。他の代表作に、国立西洋美術館新館、東京都美術館、学習院戸山図書館など。前川事務所からは丹下健三、大高正人など、次世代を代表する建築家を輩出した。

※2：2016年、松隈洋、『ル・コルビュジエから遠く離れて－日本の20世紀建築遺産－』、東京、みすず書房、pp.66-67

※3：国際標準記録史料記述一般原則

1994年国際文書館評議会（International Council on Archives : ICA）の記述標準特別委員会が採決し、ICAが承認したアーカイブズ資料目録記述の国際標準。記録史料のコンテキスト、出所を重視し、資料群の内部構造、特性を把握し、残す手法として提言された。保存センターでは、すべてISADの記述方法に従っているわけではないが、資料情報の構造についての考え方を建築資料館と共有するため、ISADの原則にあてはまる部分については、作業の際にISADの原則を援用した。ISADによるフォンド、ファイル、アイテムの定義は以下のとおり。

フォンド：形態や媒体に関わらず、活動および機能において、特定の個人、家族または団体によって組織的に生み出され、集積し、使用された記録の総体。

ファイル：同一の主題、活動、業務に関連し、作成者によって、利用や記録史料の編集処理のため、グループ化されたドキュメントの組織単位。

アイテム：記録資料の知的に分割できない最小単位。書簡、覚書、報告書、写真、録音など。

2000年、ISAD (G): General International Standard Archival Description (2nd ed.) . International Council on Archives, <https://www.ica.org/en/isadg-general-international-standard-archival-description-second-edition> (2018年3月1日確認)

2002年、田窪直規、「国際標準記録史料記述一般原則：ISAD (G) (General International Standard Archival Description) : その基本構造・考え方と問題点」、『レコード・マネジメント』44 巻、記録管理学会

中川 裕美（調査員）

5.6. CP+2018 写真展・セミナー

アジア最大級のフォトイメージングショーであるCP+2018は、横浜みなとみらい地区に於いて毎年春に開催されており、7万人の写真ファンが国内外から来場する。このCP+は、写真機材の新製品展示のみならず写真展や関連文化イベントも多数企画され、ドイツケルン市のフォトキナ、フランスのパリ写真月間の様な世界的なイベントとなりつつある。日本写真保存センターが写真展を開催した「みなとみらいギャラリー」は、このCP+2018の会期に合わせ、主展示場となるパシフィコ横浜に向かう導線上にあり、多数の来場者に日本の写真文化の歴史と広がり提示した。

写真展の概要

写真展「後世に遺したい写真」は、当センターが収蔵している30万点の写真原板から、1920年代～2000年のドキュメンタリー写真、日本人の暮らしぶりの記録写真、寺社の文化財写真など、写真104点を選定した。名取洋之助、渡辺義雄、吉岡専造、笹本恒子等、36名の写真家・団体で撮影されたものである。時代は、戦争への足音、戦中戦後、焼け跡からの復興、先進国へ再びと、日本の近現代史を写真で辿る構成となった。写真一枚一枚が、語り掛けてくれるストーリーに7千人の来場者が足を止め見入っていた。併せて写真展会場には、日本写真保存センターの収集保存活動をパネルで展示するコーナーを置き、活動内容を広報した。

セミナーの概要

最終日となる3月4日(日)には、パシフィコ横浜会議センターにて、写真展展示作品の解説をするセミナーを、写真評論家の飯沢耕太郎氏と当センターの松本徳彦氏にて開催した。

当日は、150名の聴衆が参加し、写真の時代背景や撮影意図、写真の記録としての重要性が語られた。また、日本写真保存センターの活動や写真保存のヒントについても話され、充実したセミナーとなった。

渡邊 英雄(調査員)

6. 本年度収集・調査した写真原板について

6.1. 本年度の写真原板受入数及び相模原入庫数

6.1.1. 写真原板資料受入概要

本年度は11名・団体、約91,551本の写真原板資料を受け入れた。写真原板資料の概要は表1の通り。受入数は初期調査時の概数で記す。なお各原板の詳細は6.3.で紹介する。

表1 平成29年度写真原板資料受入概要

撮影者・団体名	受入日	受入数		内容
		初期調査未 本数	初期調査済 本数	
岩波文化財写真	2017年5月19日	36,000	—	『奈良六大寺大観』『大和古寺大観』 『醍醐寺大観』『平等院大観』
岡村 崔	6月1日 7月25日 8月25日 2018年3月14日	—	2,800	イタリアの彫刻作品 マニエリスムの壁画
渡辺義雄	6月29日	—	250	東京文化会館竣工写真
高井 潔	6月30日	—	110	『日本の倉』
ホレス・プリストル	7月21日	—	710	1940～50年代の日本の様子
岩波写真文庫	8月25日	50,000	—	『岩波写真文庫』
向井 潔	10月3日	—	50	1950～60年代の街中スナップ
常盤とよ子	12月15日	—	70	1950年代の横浜
笹本恒子	12月15日	—	1,420	1940～90年代の日本各地の風景、 著名人のポートレート
杵島 隆	12月15日	—	140	『義経千本桜舞台写真』
山端庸介	2018年1月15日	—	1	『原爆の長崎』のデュープ
合計11名		86,000	5,551	

6.1.2. 相模原フィルム保存庫入庫内容

本年度の相模原フィルム保存庫への入庫作業は2017年6月16日、12月21日、2018年3月15日の3回行い、計9,229本の写真原板を収めた。写真原板の入庫内容を表2に記す。

表2 平成29年度写真原板入庫内容

撮影者名	入庫原板数
吉岡専造	669
渡辺義雄	6,959
写真協会	697
緑川洋一	153
渋谷大郎	111
山崎治雄	530
高井 潔	110
合計7名	9,229

6.1.3. 年度別各作業処理数

日本写真保存センターはこれまで70名・団体、約307,866本の写真原板資料を受け入れた。そのうち相模原フィルム保存庫へ収めた写真原板は69,921本。未処理の写真原板は237,945本。年度別の各作業処理数は表3の通り。また、調査を開始してから現在までデジタル化した写真原板の数は35,393本になった。

表3 年度別各作業処理数(2018年3月19日現在)

年度	写真原板受入数	相模原入庫数	未処理数
平成21年度	28,712	—	28,712
平成22年度	25,626	—	54,338
平成23年度	41,203	—	95,541
平成24年度	4,470	8,901	91,110
平成25年度	3,523	15,139	79,494
平成26年度	40,258	24,179	95,573
平成27年度	61,523	7,210	149,886
平成28年度	11,000	5,263	155,623
平成29年度	91,551	9,229	237,945
合計	307,866	69,921	237,945

笛木 諭 (調査員)

6.2. 本年度収集・調査した写真原板 総論

平成29年度収集した写真原板

我が国の文化財の中心をなす奈良・大和周辺の名刹の建築や彫刻、絵画、工芸、書跡などの国宝や重要文化財を撮影した、約3万6千点に及ぶ写真原板を岩波書店から寄託を受け収集・調査し、整理に完了した原板を逐次、相模原のフィルムセンターの収蔵庫で保存している。

この膨大な量の写真を撮影したのは、渡辺義雄、入江泰吉、坂本万七、小川光三(飛鳥園)、辻本米三郎(便利堂)、米田太三郎(東京国立博物館)、永野太造、藺部澄など、仏教美術、文化財撮影の最高メンバーが行い、岩波書店から『奈良六大寺大観』『大和古寺大観』として刊行された書籍に掲載された写真群である。

写真原板は8×10、5×7、4×5インチの大判のフィルムが使用され、その精緻な画像は二度と撮ることが許されない細部までが精細に撮影され、美術的価値の高い貴重な写真で、保存センターにとって最重要な原板であるといえる。それだけに調査活動には専門的技術をもった大学院卒の調査員が調査研究を行ってきた。

利活用にあたっては、岩波書店が行ってきたお寺と撮影者への使用許諾を踏襲し、利用者にはその旨を通知して、許諾の得られたものを貸出すなど、管理には十分な注意を払っている。この国宝級の文化財写真の利用は国内外からあり、利用条件を満たしたものに限り貸し出している。

同様に『伊勢神宮』を撮影した渡辺義雄の写真原板も同様な手続きののち貸し出している。

また、岩波書店からは名取洋之助が編集責任者として発行された『岩波写真文庫』(全286冊)に使用された写真原板約5万点も収集したが、一部に劣化が見られるため、整理が完了次第、順次収蔵する予定である。現在民間の収蔵庫(共進倉庫)の低温低湿庫で保管している。

戦後間もなくの横浜で撮影をはじめた常盤とよ子の『危険な毒花』に掲載された、赤線地帯で働く女性たちの写真原板65本を収集した。占領期の様相をつぶさに捉えた写真群は、量的には僅かであるが戦後ニッポンに一端を表わしたドキュメントとして貴重である。

現在103歳の笹本恒子の写真集に掲載の昭和10年代から平成までの写真の原板1,424点の寄贈を受けた。笹本は昭和15年写真協会に入会し、『写真週報』の撮影に係り、女性初の報道写真家として活動する。戦後は婦人民主新聞の嘱託、フリーとして新聞、雑誌の写真や記事を寄稿するなど、日本の政治状況や世相、庶民の暮らしなどを精力的に写す。「昭和史を彩った人たち」「昭和・あの時・あの人」展や写真集『昭和一ヒト・ひと・人』を上梓する。一貫して逞しく生きる女性を撮り続けた。

高井潔は大成建設の写真室に勤務しながら、日本の民家を撮り続け、写真集『蔵』など日本人のこころの深層に迫る洞察力あふれる眼で家々を捉える。大判サイズの原板110点が寄贈されている。

このほか、イタリア美術を撮り続けた岡村崔の大判のカラーポジフィルム「古代ローマ、ルネッサンス・バロック時代の写真」2,757点が追加寄贈された。

渡辺義雄の追加原板は、前川国男の代表作「東京文化会館」の原板253点が寄贈された。

米国人写真家のホレス・プリストルの写真原板705本が、アシスタントをしていた近藤晃から寄贈された。朝鮮動乱時代の戦後特需ブームに沸く日本の産業を捉えたもので、日本人が撮影できなかった貴重な写真群である。

杵島隆の歌舞伎「義経千本桜」のカラーフィルム141点が寄贈されるなど、次々と寄贈、寄託の申し出が遺族や関係者からあり、寄贈原板で整理・保存が追い付かない状況が来ている。

激動した時代の日本人の暮らしや世相を捉えた写真原板を主体的に収集する当写真保存センターの活動を、広く公衆に知らせるためにはじめた写真展やホームページでの広報に関心が高まってきた。

このことはようやくにして、写真フィルムの劣化や「写真の記録性」を訴え続ける当センターの活動の意義や必要性が理解されてきた証しでもある。

毎年2月に開催される印刷技術研究会のpage（池袋サンシャイン文化会館）では、写真フィルムの劣化対策、長期保存を図るための技術や包材等のセミナーに、博物館、図書館、郷土資料館などと企業や個人のアーカイブを計画、運営している関係者が多数参加され、包材メーカーなどの協力を得て、保存資材の展示や実演などを通して、原板の保存対策への関心が高まってきた。

昨年度は大阪でもセミナーを催し、定員を超す参加者で、保存対策についての研究会の必要性が求められていた。

本年3月に横浜みなとみらいギャラリーで催した「後世に遺したい写真」展（大四切りと小全紙のモノクロプリント104点）には、4日間で7,000人を超える入場者があり、「写真」が時代を記録するメディアとして有力な装置として必要であることを実証していた。

松本 徳彦（公益社団法人日本写真家協会副会長）

6.3. 調査した写真原板詳細

6.3.1. 新規受け入れ

いわなみぶんかざいしゃしん
岩波文化財写真

『奈良六大寺大観』(全14巻)、『大和古寺大観』(全7巻)、『醍醐寺大観』(全3巻)、『平等院大観』(全3巻)は、寺社の建築、仏像、彫刻、工芸、絵画、書跡など、寺社の所蔵する文化財に対して、研究者による徹底的な調査に基づく解説と、第一線で活躍する写真家によって綿密に撮影された写真とで構成された書籍群である。詳細は5.3.「岩波文化財写真」原板について、を参照。

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2017年5月19日に、4×5判モノクロネガを中心に、約36,000点の原板を受け入れた。その他に原板ごとの撮影情報が記録されたカードを約13,500点、写真集のレイアウトを決める為に使用されたプリントのファイルを約300点、周辺資料として受け入れた。

○原板の内容

『奈良六大寺大観』(全14巻)、『大和古寺大観』(全7巻)、『醍醐寺大観』(全3巻)、『平等院大観』(全3巻)に掲載された写真原板。書籍に掲載されなかった別カットの写真原板も全て受け入れている。

○原板の状態

カラーポジは変色、褪色がひどいものがほとんどだった。しかし、それらを複製したカラーポジは作成が比較的新しいためなのか、印刷物に掲載されている画像と近い色を保っていた。

カビやビネガーシンドロームは無いと言い切っていいほど見られなかった。

たかいきよし

高井潔 1938(昭和13)年 - 東京生まれ。

1961年、日本大学芸術学部卒業。卒業後、大成建設に入社。記録用の建築写真を撮影。勤務のかたわら写真家として日本の古建築を撮影する。1998年、大成建設を定年退社。以後フリーランスとして活動しながら、日本大学芸術学部写真学科講師を勤める。日本建築写真家協会代表。

主な写真集：『日本の倉』(淡交社 1973年)、『建築写真の世界』(朝日ソノラマ 1976年)

『建築写真術』(学芸出版社 1988年)

『日本の民家 美と伝統 東日本編・西日本編』(別冊太陽 2006年)。

主な写真展：「日本の民家」(1973年)、「日本の倉」(1973年)、「日本の屋根」(1983年)

「萱葺きの屋根」(2014年)

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2017年6月30日に、4×5判モノクロネガを中心に、110点を受け入れた。

○原板の内容

1970年代に、日本各地の倉を撮影したものである。写真集『日本の倉』に掲載された写真原板のみが提供された。

○原板の状態

4×5判モノクロネガの状態は良好であるが、8点あるカラーポジには褪色が見られた。

いわなみしゃしんぶんこ
岩波写真文庫

1950～56年に刊行された、自然、文化、文芸、地理、科学技術、工業製品、各地の風俗など、様々な対象を写真で捉えた、全286冊の書籍である。詳細は5.4.「岩波写真文庫」原板について、を参照。

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2017年8月25日に、135判モノクロネガ、120判モノクロネガ、大名刺判モノクロネガ、4×5判モノクロネガ、約50,000点を受け入れた。

○原板の内容

岩波写真文庫に掲載された原板の他、ポンペイ・エトルリアの写真集に掲載された原板も含まれる。

○原板の状態

135判、120判には、著しい劣化は認められないが、シートフィルムの一部に、激しい劣化が認められる。

ときわこ
常盤とよ子 1930(昭和5)年 - 横浜生まれ。

1951年、東京家政学院卒業。その後、写真家を目指す。アマチュア女性写真家団体「白百合カメラクラブ」に参加。カメラ雑誌上で精力的に作品発表を行う。1962～65年、テレビ映画「働く女性たち」を制作。1974年、横浜市使節団としてソ連を訪問、撮影する。1987年、藤沢文化センター講師を勤める。

主な写真集：『危険な毒花』(三笠書房 1957年)。

主な写真展：「働く女性」(小西六フォトギャラリー 1956年)、「10人の眼」(小西六フォトギャラリー 1957年)

「沖縄の微苦笑」(富士フォトサロン 1959年)、「わたしは大臣」(月光ギャラリー 1960年)

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2017年12月15日に、135判モノクロネガを中心に、65点を受入れた。

○原板の内容

1950年代の横浜、真金町付近の赤線地帯を撮影したものである。赤線地帯で働く女性やその家族たちを写すなど、女性としての立場を生かした写真が多い。戦後復興を支えたにも関わらず、あまり語られることのない、女性たちの姿を映した貴重な写真原板である。

○原板の状態

酢酸臭が認められるが、著しい劣化は認められない。ほぼ全ての原板が、新しい包材に詰め替えられている。

ささもとつねこ
笹本恒子 1914(大正3)年 - 東京生まれ。

大妻技芸学校高等家政科中退。1936年頃から、東京日日新聞で挿絵カットを描く。1940年、財団法人写真協会に勤め、『写真週報』の写真撮影に携わる。日本初の女性報道写真家として活躍。戦後、千葉新聞社を経て、フリーランスとなり、新聞やグラフ誌に写真を提供する。写真以外にも、絵画教室や、服飾デザインの仕事にも携わる。昭和を代表する著名人のポートレートや日本各地のスナップ写真を多数撮影。日本写真家協会創立会員。

主な写真集：『ライカでショット!お嬢さんカメラマンの昭和スナップ』(鎌倉書房 1989年)

『輝く明治の女たち』(NHK出版 1992年)、『素顔の三岸節子』(光村出版 1998年)

『100歳のファインダー』(東京新聞 2014年)、他

主な写真展：「生きたニューロック写真展」(丸善ギャラリー 1950年)

「昭和を彩った人たち」(ドイフォトプラザ渋谷 1985年)

「"いま"を生きる明治の女性たち 60人」(銀座資生堂別館 1996年)

「笹本恒子100歳展」(日本新聞博物館 2014年)、他。

主な受賞： 東京女性財団賞(1997年)、第16回ダイヤモンドレディ賞(2001年)

吉川英治文化賞(2011年)、日本写真家協会賞功労賞(2011年)、ルーシー賞(2016年)

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2017年12月15日に、135判モノクロネガ、120判モノクロネガ、4×5判モノクロネガを中心に、1,424点を受入れた。

○原板の内容

1940～90年代の日本各地の風景、著名人のポートレートが主である。写真集に掲載された、笹本の代表作のほぼ全てが含まれている。

○原板の状態

写真展、写真集に使用された原板はまとまった状態で保存されている。多くが良好な状態を保っているが、ビニール製の通気性の悪いフィルムホルダーに収納されている原板が多く、酢酸臭が認められる原板もある。

6.3.2. 受入継続中の写真原板の特徴

昨年度までに写真原板を受け入れた写真家のうち、本年度も引き続き受け入れを行った写真原板の特徴を記す。写真家のプロフィールは前年度までの報告書にて記載済みのため、写真原板の特徴のみを記す。

おかむらたかし
岡村 崔

写真原板の特徴

本年度は、第3回～第6回受入として、約2,800点の写真原板と周辺資料を受け入れた。

【第3回受け入れ】

○受入日と原板の数量

2017年6月1日、5×7判カラーポジを中心に、2,729点を受け入れた。

○原板の内容

撮影対象は主として、古代ギリシア、ローマから現代までのイタリアの彫刻作品。特にミケランジェロの彫刻作品が多かった。また昨年と同様に、夫人の岡村眞弓氏による、原語、ラテン語、英語、日本語のタイトルも網羅した、被写体内容についての詳細な目録データもデジタルデータで受領した。

○原板の状態

大半は良好だったが、カラーポジには褪色がみられた。

【第4回受け入れ】

○受入日と原板の数量

2017年7月25日、4×5判カラーポジ、22点を受け入れた。

○原板の内容

昨年、第2回受け入れで収集した「絵画シリーズ」の写真原板のうち、受け入れ時に出版社に貸し出していた原

板が岡村眞弓氏に返却されたため追加収集した。撮影被写体はイタリアの教会内部に描かれたマニエリスムの壁画。

○原板の状態

大半は良好だったが、一部に褪色がみられた。

【第5回受け入れ】

○受入日と原板の数量

2017年8月25日、8×10判モノクロネガ、1点を受け入れた。

○原板の内容

1921年の昭和天皇(摂政時代)ヴァチカン訪問記念写真の複写。

○原板の状態

状態は良好だった。

【第6回受け入れ】

○受入日と原板の数量

2018年3月14日、プリント5点(箱)を受け入れた。

○原板の内容

第3回受入の写真原板のコンタクト(密着)プリント。

○原板の状態

状態は良好だった。大半がモノクロRCプリント。数枚、8×10インチのバライタプリントがあった。プリント裏には該当する写真原板の元番号(写真家によって付けられた番号)が書き込まれていた。

わたなべよしお
渡辺義雄

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2017年6月29日、第7回受け入れとして、4×5判モノクロネガを中心に、253点を受け入れた。

○原板の内容

1961年の4月から5月にかけて撮影された、前川國男設計の東京文化会館の竣工写真である。

○原板の状態

状態は良好だった。

ホレス・ブリストル

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2017年7月21日に、第3回受け入れとして、120判モノクロネガ、705点を受け入れた。

○原板の内容

1940～50年代の米軍基地や日本各地の祭りなどが、海外特派員の目線で撮影されている。占領期の日本の様子を窺い知ることのできる、貴重な写真原板である。

○原板の状態

原板は一コマごとに切断され、コンタクトプリントと共にネガホルダーに収められている。

むかいきよし
向井潔

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2017年10月3日、135判モノクロネガを中心に、46点を受け入れた。

○原板の内容

1950～60年代に撮影された原板が多かった。撮影対象は国鉄の工場やいすゞ自動車などの企業系の仕事と思われるものと新宿、三軒茶屋、佃島などのスナップだった。

○原板の状態

ビネガーシンドロームによる劣化で、フィルムベースが収縮し乳剤面とのずれが発生している原板や、カーリングが酷い原板があったがどれも酢酸臭はなかった。

きじまたかし
杵島隆

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2017年12月15日に、第2回受け入れとして、4×5判カラーポジ128点、4×5判カラーネガ3点、135判カラーポジ9点、135判カラーネガ1点の、計141点を受け入れた。

○原板の内容

『義経千本桜舞台写真』に掲載された写真原板。全てデュープである。

○原板の状態

著しい劣化は認められないが、一部のカラーポジに褪色がみられた。

やまはたようすけ
山端庸介

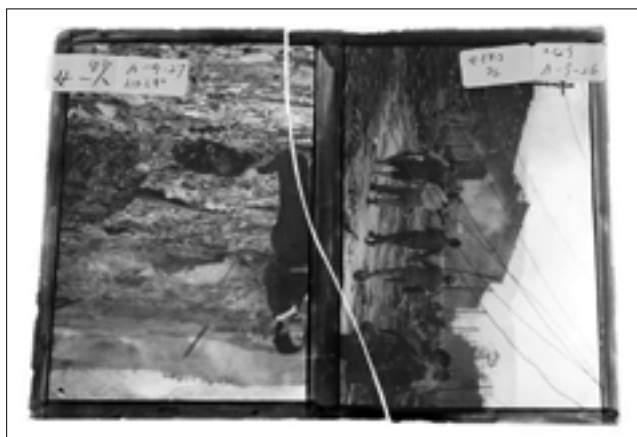


図1 割れたガラス乾板

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2018年1月25日、第2回受け入れとして、ガラス乾板1点を受け入れた。

○原板の内容

1945年8月10日、原爆投下直後の長崎を撮影したフィルムから作成されたデュープである。写真集『原爆の長崎』に使用された二枚の写真が写っている。

○原板の状態

中央部で二つに割れている。

小泉 洋一 (事務局長)
中川 裕美 (調査員)
笛木 諭 (調査員)
河原 健一郎 (調査員)
渡邊 英雄 (調査員)

7. 写真原板データベース

日本写真保存センターでは、写真原板の収集・調査・保存・利活用の為に、アーカイブ化も進めており、保存作業の写真原板データベースシステムを構築させ、日々の作業を効率よく遂行できるようにシステム構築・改良の業務も進めている。平成25年度にはデータベースシステム「SAI-CHI」を利用したシステムを立ち上げるため、保存センターが当初利用していた「FileMaker」で作られた、写真原板のデータベース構造を生かした「SAI-CHI」システム用の管理データベースシステムの開発を開始した。平成26年度末にはプログラムが完成し、平成27年度ではシステムの操作性や問題点の修正を行い、「FileMaker」で開発した管理用データベースのデータを「SAI-CHI」で開発した管理用データベースへ移行作業を実施した。平成28年度では実務レベルで使用出来るようになった、管理用データベースを実際に原板調査作業で利用しながら不具合の検証と改良を継続して行った。本年度は作業者が使いやすいシステムに改修を行った。公開用閲覧データベースについては、平成23年度に美術館・博物館収蔵品用のデータベースとして使われていた「MuseScope」の利用を開始したが、写真原板の閲覧システムとしては、原板閲覧に適さず、平成24年度に写真原板データに合った「SAI-CHI」システムを導入した。その後閲覧データベースの検索性や閲覧性を高める実証実験を行いながらブラシアップを継続し、平成29年度には5,000点以上のデータを閲覧用データベースにアップした。

小泉 洋一（事務局長）

7.1. 本年度作業概要

日本写真保存センターのデータベースは2つ存在する。ひとつは調査した写真家・原板の詳細情報を入力するための管理用データベース。もうひとつは管理用データベースに登録された情報から公開に適した部分のみを表示し、それを一般の方が見られるようにした公開用閲覧データベース。

管理用データベースは凸版印刷株式会社の汎用データベースシステム「SAI-CHI」を利用して構築し、2015年度に基本的な部分の開発が終了した。昨年度に引き続き今年度も実務レベルで使用できるようになった管理用データベースで実際に調査作業を行い、使用感を検証した結果、実務上非効率な部分について改良を行なった。

公開用閲覧データベースも管理用データベースと同じシステム「SAI-CHI」を利用している。公開用閲覧データベースは2016年12月からWeb上で公開をはじめた。今年度は検索機能の改善と調査が完了した写真原板の情報の追加を行なった。現在は24名・団体、5,119点の写真原板のデータを公開している。

本年度の管理・閲覧データベースの開発・修正の詳細は7.2.で記す。

笛木 諭（調査員）

7.2. 本年度作業詳細

7.2.1. 管理用データベースの開発

7.2.1.1. テーブルの入出力機能

データベース内の単純構造のテーブルに限り、その入出力が可能となる開発を行った。これによりデータベース内のテーブル構造の関連情報がないものは、センター職員により一括で修正ができるようになった。（図1）

【テーブルのエクスポート】

著作権情報 ▼ テーブルをエクスポート

【テーブルのインポート】

参照... ファイルが選択されていません。

著作権情報 ▼ テーブルをインポート

図1 テーブルのインポートとエクスポート画面

7.2.1.2. 閲覧用データベースの出力機能

現在の閲覧用データベースは管理用データベースから手作業で作り上げていた。これを、管理用データベースから公開する写真家のみを自動で出力する機能を開発した。さらに、閲覧用データベースへの出力ファイルの適用マニュアルを作成した。(図2)

【閲覧用DBのエクスポート】

エクスポート

図2 閲覧用データベースの出力画面

7.2.2. 閲覧用データベース

7.2.2.1. 検索機能の改善

現在の閲覧用データベースのキーワード検索で不可能であった、発行者情報とページ情報での検索機能を追加した(図3)。また、特定条件の検索結果ページから表示するスクリプトを作成し、提供した。

公益社団法人日本写真家協会 日本写真保存センター 写真家データベース

日本写真保存センター 撮影者紹介 写真家業績紹介 ヘルプ/お問い合わせ

◆検索結果

撮影者名: [] 撮影者一覧 撮影年代: [] ~ []

写真家別写真名: [] 写真家別写真一覧 撮影地: 国 [] 地域 []

◆カテゴリ検索

☐ 風景 ☐ 建築物 ☐ 産業 ☐ 交通 ☐ 工業・芸術 ☐ 動物・自然 ☐ 人物 ☐ 社会・文化・風俗 ☐ 事件・災害・戦争

◆キーワード検索 [西沢社 p.12]

◆表示順 撮影年: ☒ 昇順 ☐ 降順 撮影者: ☒ 昇順 ☐ 降順

[検索] [クリア]

◆検索結果

27件中 1 ~ 27 件目

1 西沢 邦之助 撮影写真の保存時代 写真一 1925年 1925年

2 西沢 邦之助 撮影写真の保存時代 写真一 1925年 1925年

3 西沢 邦之助 撮影写真の保存時代 写真一 1925年 1925年

4 西沢 邦之助 撮影写真の保存時代 写真一 1925年 1925年

5 西沢 邦之助 撮影写真の保存時代 写真一 1925年 1925年

図3 閲覧用データベースの検索画面

7.2.3. 写真保存センターデータベースの今後について

今年度はデータベースのアクセシビリティを改善する事を中心に行った。この結果、センター職員のみでデータベースの大半を一括編集できるようになり、作業効率の向上が見込まれる。公開用閲覧データベースについても同様に、システム開発者などの作業なしに特集が組める状態になり、閲覧データベースの変更が比較的自由に行えるようになった。

上記の機能が開発された事により、データベース機能として一通りの機能は揃った。

今後は閲覧用データベースを使った写真保存センターのプロモーションを行い、認知度を高めると共に、収益モデルを見据えた運用方法やその開発が求められるであろう。

西川 裕規(凸版印刷株式会社 トッパンアイデアセンター 関西TIC本部 ICTソリューション部)

寺師 太郎(凸版印刷株式会社 文化事業推進本部VR・アーカイブ技術開発部 部)

小宮 広嗣(凸版印刷株式会社 トッパンアイデアセンター・フォトクリエイティブ部)

7.3. 写真原板アーカイブの活用とデータベースシステム

7.3.1. データベースシステムの変遷

日本写真保存センター(以下、写真保存センター)が所蔵する写真原板は、図像としての価値はもとより、撮影を含む写真文化全体を後世に伝える貴重な文化資料である。写真保存センターは、これらの所蔵資料を管理するため、写真原板台帳の作成とデータ化に早い段階から取り組んできた。さらに台帳の作成と並行してスキャニングにも取り組み、写真のデジタルデータ作成をおこなっている。所蔵資料とともに写真原板台帳データと画像データをあわせて保存し、写真原板アーカイブとして管理してきた。^{※1}

写真原板アーカイブは当初、所蔵資料の管理と保存の観点のみで設計され作成されていたが、2010(平成22)年度の調査研究において、その一部を「写真原板データベース」として公開し活用するための方向性が示された。^{※2} そのことを受けて、2011(平成23)年度には写真原板台帳のデータベース化をおこない、^{※3} またFileMakerによる本格的なデータベースシステムを構築した。^{※4} さらにその先を見通す取り組みとして「MuseScope」を用いたWeb公開用システムの調査研究と試行が実施された。^{※5 ※6}

これらの成果を受け、2012(平成24)年度にはサーバサイドによる本格的なWeb公開用のデータベースシステムを導入した。凸版印刷株式会社が開発している収蔵資料・書籍管理サービスSAI-CHIをベースにカスタマイズした専用のシステムである。^{※7} なお所蔵資料管理用としての写真原板データベースには継続してFileMakerにより構築したシステムを使用し、CSV形式による「MuseScope」とのデータ連携によって、限定的な公開サービスの実証運用をおこなった。2013(平成25)年度には、この管理用システムについてもSAI-CHIベースのシステムへ移行することを決定し、2015(平成27)年度にかけて開発および移行作業を実施した。その結果、写真保存センターの写真原板データベースは管理用・公開用ともにSAI-CHIへの移行を全て完了し、公開用については2016(平成28)年12月に一般公開を開始した。

本章では写真原板データベースについてこれらの経緯をふまえて、所蔵資料管理用と公開用それぞれのシステムについて、現状と今後について検討する。

7.3.2. 所蔵資料の管理とデータベースシステム

写真家から寄贈・寄託された写真原板資料を収蔵管理するために、写真保存センターでは詳細な写真原板台帳を作成している。台帳への記述内容は多岐にわたり、例えばフィルムのタイプや製造会社、保存状態などを可能な限り資料から読み取り作成している。また資料の受け入れ時の調査内容もあわせて作成する。撮影時期や撮影場所、撮影技術、掲載誌など、写真の内容に関する情報についても記録している。

管理用の写真原板データベースは、この基本台帳をデジタルで管理するために設計・構築されたシステムである。第1世代のFileMakerによるシステムでは、テーブル数が合計29にものぼる規模の大きなデータベースを構築しており、専門性の高い記述が可能のように配慮されている。^{※8} こと収蔵資料の管理という観点のみから見た場合には、このシステムは十分な役割を果たしていたと言える。

しかしシステムには課題もあった。ひとつには運用の問題である。FileMakerによるシステムは、改修が比較的に容易であるがゆえに、システムの詳細を担当者しか把握できない状況が生まれやすい。またネットワークによるデータの共有という点でも制約が大きく、特定のPC端末でしか入力や更新ができない設計となることも多い。もうひとつは情報公開の問題である。外部予算で運営する写真保存センターには、成果を目に見える形にするため所蔵資料を一般に公開することが求められる。FileMakerはWebへの公開機能を備えてはいるが、追加のライセンス費用がかかることやシステム構築と運用に対応できる技術者が限られることなどから、実装と運用は必ずしも簡単ではない。

そこでこれらの課題を解決する方策として、写真保存センターは写真原板データベースを2013(平成25)年度からクラウド型データベースシステムであるSAI-CHIへ移行し、2015(平成27)年度に完了した。結果として安定して運用可能な所蔵資料管理システムのWeb公開環境を実現したといえる。

一方でシステムの移行によって、SAI-CHIはふたつの役割を担うことになった。すなわち 1. 所蔵資料に関する情報を管理することと、2. デジタルアーカイブズを公開するための情報を管理することである。一般的にひとつのシステムに目的の異なる複数の役割を持たせることは設計を複雑にし、各々の自由度を低下させる。そこに新システムの課題がある。

所蔵資料の管理と公開を別々のシステムで実現することはもちろん可能である。そのことは2011(平成24)年度に実施した「MuseScope」との連携実証でも示されている。^{※6} FileMakerによる資料管理データベースからCSV形式で管理データをエクスポートし、それを変換した上で公開用データベースに取り込むこの方式は、設計のうえでも無理がなく実用性も高い。今後の柔軟なシステムの拡張を考える上では、これらの役割をシステムとして分けることも含めた検討が有効であると思われる。

7.3.3. 写真原板データベースの公開環境

新たに構築したシステムによって、写真保存センターは写真原板データベースの一般公開を実現した。^{※9} 検索パネルを前面に配置したインタフェースは、資料を一覧する上で必要にして十分な機能を備えており、今後も写真保存センターの情報公開を支える基幹サービスとしての役割が期待できるものである。さらにデータベースでは、写真の被写体や撮影場所、その写真が掲載された写真集などの媒体に関する記述もあわせて公開しており、所蔵資料の「目録」というよりは「フォトライブラリ」としての内容を備えた発信を実現している。

その一方で、このデータベースが写真保存センターの立場で写真文化の魅力を十分に伝えているかという観点では、やや物足りなさも感じる。プロの写真家による写真原板資料の可能性を引き出すためには、まだ十分に工夫の余地があると思われる。たとえば写真家の一覧がデータベースには掲載されているが、撮影技法や使用した機材などの記述はなく、肝心の所蔵資料への導線も用意されていないという状況である。その写真家が年間に何本のフィルムを使用し、何コマの写真を撮影したかといった基本的な情報も得られない。写真原板データベースを活用することで、そのような写真制作に関する情報を一般に公開することも可能ではないだろうか。

文化資料としてのフィルムアーカイブズ公開活用の先行事例としては、東京国立近代美術館フィルムセンターと国立情報学研究所が共同で開発し公開した「日本アニメーション映画クラシックス」※¹⁰がある。このサイトでは、1917年から1944年に日本で作成されたアニメーション映画のうち、フィルムセンターが所蔵しデジタル版の公開が可能な64本を動画配信機能によって全編公開している。また映画の詳細ページでは、フィルムと作品の調査研究をふまえて、制作クレジットや上映時間、音声の有無、カラーの種類、作品の解説や来歴、デジタル復元の過程なども発信している。さらに専門家ではない一般の利用者にもわかりやすいように、作品を演出技法や登場するキャラクターなどから探すこともできるよう工夫している。



図4 「日本アニメーション映画クラシックス」トップページ

このサイトは「映画におけるデジタル保存・活用に関する調査研究(BDCプロジェクト)」※¹¹の一環として制作されたものである。所蔵資料の調査研究とデジタルアーカイブズの活用という点で写真保存センターが実施するプロジェクトとの共通点も多く、写真原板データベースの公開を考える上でも参考になるものと思われる。

7.3.4. 今後について

写真保存センターが所蔵する写真原板は、写真家による作品の制作過程がわかる貴重な資料である。写真原板データベースを公開することによって、これまで写真家本人しか知りえなかった技術や考え方を学びとることができると思われる。近年、写真の記録方式はフィルムからデジタルセンサーへと大きく変化した。しかし一瞬の光をレンズとシャッターで捉えて固定するという写真の基本に変わりはない。スマートフォンによるものを含めて日常的に写真撮影に関わる人口は増え続けており、伝統的な撮影技術を含めた写真文化全体に対する潜在的な欲求はむしろ高まっているといえる。写真原板データベースは、将来にわたって広く一般の利用者の興味を惹く対象であり続けるだろう。

公開の方向性としてフォトライブラリとしての充実をはかることも写真文化を担い広める立場として重要な役割ではあると思うが、必ずしも写真原板を所蔵する写真保存センターが手がけなくてはならないものではない。写真原板

の価値を考えた時には、写真の魅力と奥深さを制作者の視点から再構成し発信することが、写真保存センターに期待される役割であると考え。これまでの調査研究成果を活かし、写真家に焦点をあてた情報発信をさらに進めることが望ましい。

参考文献

- ※1：中川裕美「7.1 写真原板の収集と保存状況、7.2 スキャニングによるデータ作成」『我が国の写真フィルムの保存・活用に関する調査研究報告書（平成21年度）』pp.26-35, 日本写真家協会編, 平成22年3月.
- ※2：高橋則英「5.2 データベースの構築」『我が国の写真フィルムの保存・活用に関する調査研究報告書（平成22年度）』pp.13-35, 日本写真家協会編, 平成23年3月.
- ※3：中川裕美「8. 写真原板台帳とデータベース」『文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究報告書（平成23年度）』pp.19-30, 日本写真家協会編, 平成24年3月.
- ※4：志賀裕一「9. デジタル化の方法」『文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究報告書（平成23年度）』pp.31-38, 日本写真家協会編, 平成24年3月.
- ※5：寺師太郎「10. ミューズスコープについて」『文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究報告書（平成23年度）』pp.39-44, 日本写真家協会編, 平成24年3月.
- ※6：小宮広嗣「12. ミューズスコープによるWeb公開」『文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究報告書（平成23年度）』pp.51-57, 日本写真家協会編, 平成24年3月.
- ※7：木下悠, 奥平正幸「12. SAI-CHIによるWeb公開」『文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究報告書（平成24年度）』pp.42-43, 日本写真家協会編, 平成25年3月.
- ※8：「(巻末付録1) 既存管理用データベースのリレーション図」『文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究報告書（平成25年度）』日本写真家協会編, 平成26年3月.
- ※9：「写真フィルムの保存・活用に関する調査研究」<http://photo-archive.jp/>
- ※10：「日本アニメーション映画クラシックス」<http://animation.filmarchives.jp/>
- ※11：「映画におけるデジタル保存・活用に関する調査研究（BDCプロジェクト）」
<http://www.momat.go.jp/fc/research/bdcproject/>

丸川 雄三 (国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授)

8. 情報発信・その他

8.1. 情報発信

本年度は以下のように日本写真保存センター(以下保存センター)の調査成果を発信した。

展示では、「後世に遺したい写真」展で約7,000人を集め、広く写真原板収集の必要を伝えた。セミナー・講演の参加者は、美術館・博物館・図書館・地方自治体の関係者および、研究者が多く、保存センターの写真原板保存方法、データベース化への関心がうかがわれた。また、他機関、学会からの依頼講演も増えた。写真原板の保存についての講演依頼は保存センターの活動を始めた当初からあったが、保存センターの認知の広がりにつれ、近年は写真原板のデータベース化、アーカイブ化についての講演依頼が増加した。依頼へは積極的に応え、保存センターの調査成果を伝えると共に、他機関の現状を学び、情報交換に努めた。

写真画像利用は、国内外から申込みがあり、建築、文化財などの専門的な画像が研究、展示、出版で利用された。

8.1.1. 展示

「後世に遺したい写真」日本写真保存センター写真展(詳細は5.6.)

日時：2018年3月1日(木)～4日(日) 11:00～19:00(最終日は18:00まで)

会場：みなとみらいギャラリー(神奈川)

概要：日本写真保存センターが収集保存している写真原板から1920～2000年代に撮影された作品、約100点の新たなプリントを制作し、展示を行った。

8.1.2. セミナー

8.1.2.1. 日本写真保存センター大阪セミナー

「写真フィルムを長期保存するには…」(詳細は8.2.)

日時：2017年10月20日(金) 14:00～16:30

会場：メットライフ本町スクエア(旧大阪丸紅ビル) B1 会議室(大阪)

概要：国立民族学博物館園田直子氏による資料保存についての講演と、日本写真保存センターによる写真原板の適切な保存およびデータベース化についての講演を行った。あわせて包材各社のデモンストレーションも行った。

8.1.2.2. page2018オープンイベント 「日本写真保存センター」セミナー

「一劣化したフィルムへの対策 ― あなたのフィルムは大丈夫ですか!」(詳細は8.3.)

日時：2018年2月7日(水) 13:30～16:30

会場：池袋サンシャインシティ文化会館7階710号室(東京)

概要：講師に写真家塚原琢哉氏を迎え、劣化した写真原板からプリントを制作した塚原氏の手法を紹介。日本写真保存センターでは写真原板の適切な保存をテーマに講演し、あわせて包材各社のデモンストレーションも行った。

8.1.2.3. 過去から未来へのメッセージ「後世に遺したい写真」(詳細は5.6.)

日時：2018年3月4日(日) 13:00～14:30

会場：パシフィコ横浜会議センター303(神奈川)

概要：写真展「後世に遺したい写真」にあわせ、飯沢耕太郎(写真評論家)、松本徳彦(写真家・日本写真家協会副会長)で展示作品を解説する対談を行い、写真原板保存の重要性を説明した。

8.1.3. 招待講演ほか

8.1.3.1. 第147回DB⁺会例会

日時：2017年7月19日(水) 18:30～20:00

会場：科学技術振興機構(JST)東京本部別館(東京)

主催：DB⁺会

プログラム：「写真原板アーカイブの実践」 中川裕美(日本写真保存センター調査員)

概要：データベース、アーカイブの研究会。参加者16名。保存センターの活動、特にデータベース化について紹介した。参加者には情報工学、アーカイブの有識者が多く、より効率的な情報処理の方法などについてアドバイスを受けた。

8.1.3.2. 近現代史資料の整理・保存・アーカイブ化に悩む実務者たちの勉強会

日時：2017年10月4日(水) 15:00～18:00

会場：国立情報学研究所1901会議室(東京)

主催：一般社団法人学術資源リポジトリ協議会 / 共催：合同会社AMANE

プログラム：「文献資料について」 堀井美里(合同会社AMANE)

「写真資料について」 中川裕美(日本写真保存センター調査員)

「映像資料について」 山下俊介(北海道大学総合博物館)

概要：近現代史資料の整理・保存・アーカイブ化に関する勉強会。参加者約20名。取り扱いに多くの困難を抱えている近現代資料を理解し、整理、情報化する方法を議論することを目的として、近現代史資料の整理・調査・研究に関わる実務者・研究者を対象に開催された。参加者にはアーカイブ実務の経験者が多く、メタデータを与える階層や調査員同士の情報の共有の方法など、具体的な事例についての議論が行われた。

8.1.3.3. 平成29年度 画像保存セミナー

日時：2017年11月1日(水) 9:55～17:45

会場：東京都写真美術館ホール(東京)

主催：一般社団法人日本写真学会画像保存研究会

プログラム(抜粋)：講演6 16:45～17:45

「写真原板アーカイブ作成の方法 ―日本写真保存センターの実践から―」

松本徳彦、中川裕美(日本写真保存センター)

概要：日本写真学会の画像保存研究会が、写真画像と画像記録物の確実な保存を目指し、広く情報を発信する場として開催しているセミナー。参加者は約130名。研究者(学生含む)、美術館・博物館の写真保存担当者、写真感材メーカーの開発者などが多く参加していた。講演では、保存センターの写真原板保存とデータベース化の実際を紹介した。講演後は、写真原板コンタクト(密着)のデジタル画像をフラッドベッドスキャナでとる理由などについて質問があり、簡便で効果的、かつ継続可能な写真原板の保存・データベース化の方法が求められていることがうかがわれた。プログラムには、「光ディスクによるデータの長期保存」など、保存センターとしても関心があるテーマの発表も多く、発表者と情報交換に努めた。

※ 発表内容は以下のタイトルで日本写真学会学会誌へ掲載。

中川裕美、「写真原板アーカイブ作成の方法 ―日本写真保存センターの実践から―」、『日本写真学会誌』第81巻第1号、pp.6-17、2018年

中川 裕美(調査員)

8.1.3.4. 平成29年度アーカイブ保存修復研修(基礎コース)+(実技コース)

日時：2017年11月20日(月)～22日(水) 9:55～17:45

会場：国立女性教育会館(東京)

主催：(独)国立女性教育会館(NWEC)

プログラム(抜粋)：11月21日 / 基礎コース・2日目 講演2「写真・フィルムの保存方法」

山口孝子(東京都写真美術館保存科学専門員 / 日本写真保存センター諮問委員)

概要：国立女性教育会館では、女性の歴史を今に生かし、未来につないでいくために、女性に関わる原資料(女性アーカイブ)の保存と活用に取り組んでいる。その活動の一環として、アーカイブの保存や整理について新しい情報を求める方や、これから業務に取り組む方のために、平成21年度からアーカイブ関連の研修を実施している。今回は、写真・フィルムの保存方法についての講演依頼を受けたため、写真やフィルムの劣化要因、規格、保存環境の整備、修復・保護処理に関して、改修後の収蔵庫での動画を交えて解説した。プログラムでは、基礎コースで講演と、アーカイブの実践報告が行われ、実技コースでは紙資料の修復関連実習があった。講演後には、ディスカッションと女性アーカイブセンター見学が行われた。参加者は、「基礎コース」には38名(定員30名)、「実技コース」は28名(定員20名)であった。19名が図書館関係者、7名が研究機関からの参加であった。

※ 当日の資料に関してはHPからダウンロードが可能になっている。

<https://www.nwec.jp/event/training/archivist2017.html>

山口 孝子(東京都写真美術館保存科学専門員)

8.1.4. 利活用・メディア紹介

8.1.4.1. 利活用

本年度は以下の原板利用があった。

- 渡辺義雄：神奈川県立近代美術館、「建築家・大高正人と鎌倉別館」展
小学館、『週刊 ニッポンの国宝100』37号
森美術館、「建築の日本展」
- 岩波文化財写真：小学館、『運慶大全』
JR東海、やまみちの会会報誌『そらみつやまと』
金沢美術工芸大学、「上品上生図復元研究のため」
(株)樫出版社、『伊勢神宮と出雲大社』
柏書房(株)、『日本建築インテリア史』
富山大学、アジア鑄造技術史学会誌『FUSUS』10号 掲載論文「法隆寺伝橋夫人念持
仏厨子阿弥陀三尊像の造形表現と鑄造技法および切削研磨」
思文閣出版、『法隆寺史』
- 山端庸介：ウェストミンスター大学メディア・アート・デザイン学科、「論文使用」
- 岡村 崔：文藝春秋社、塩野七生『男の肖像』

8.1.4.2. メディア紹介

日本写真保存センターで記録した写真原板劣化事例の写真が、NHK室蘭放送局「ホットニュース北海道」(2017

年3月23日放映)で紹介された。また、「後世に遺したい写真展」の記事が大分合同新聞、2018年3月17日(17面)へ掲載された。

8.1.5. 他機関への協力

本年度は、保存センターで収蔵している写真原板に関係する以下の展示に協力を行った。

8.1.5.1. 写真展「東京文化会館 1961 ～渡辺義雄が撮らえた造形美～」

日時：2017年5月31日(水)～9月10日(日) 10:00～19:00

会場：東京文化会館小ホール入口スロープ(東京)

主催：東京文化会館 / 連携：公益財団法人東京都歴史文化財団

概要：公益財団法人東京都歴史文化財団連携事業「ル・コルビュジエと前川國男」の一環の写真展。連携事業「ル・コルビュジエと前川國男」は、2016年に国立西洋美術館が、東京初の世界文化遺産に登録されたことを記念して開催された。写真展では、東京文化会館を撮影した渡辺義雄のプリントを新しく制作して展示。保存センターはプリント作成の際に協力を行った。

8.1.5.2. 名誉市民渡辺義雄生誕110周年記念展

日時：2018年2月24日(土)～28日(水) 10:00～18:00(最終日は17:00まで)

会場：三条東公民館(新潟)

主催：三条市

概要：渡辺義雄の生誕110周年記念展として出身地、新潟県三条市で開催された写真展。保存センターからは渡辺義雄が三条市を撮影したプリントと資料の貸し出し、プリント展示へのアドバイス、トークショー協力などを行った。

8.1.6. 見学

美術館、博物館、アーカイブ関係者ほかの見学希望を以下のように受け付け、情報交換を行った。

8.1.6.1. 日本写真保存センター支援組織会員

日付：2017年6月16日(金)

訪問先：相模原フィルムセンターフィルム収蔵庫

訪問者：支援組織会員各社から計10名

8.1.6.2. 株式会社朝日新聞社

日付：2017年6月21日(水)

訪問先：保存センター作業室

訪問者：報道局フォトアーカイブ構築チームから1名

8.1.6.3. 合同会社AMANE

合同会社AMANEは、学術資源の保存と情報資源化業務を行う科学研究費補助金取扱規定第2条第8項に規定する研究機関。

日付：2017年6月30日(金)

訪問先：保存センター作業室

訪問者：代表社員、研究員計3名

8.1.6.4. ワシントン・ナショナルギャラリー（National Gallery of Art Washington, DC）

ワシントン・ナショナルギャラリーは、アメリカ合衆国ワシントンD.C.に所在する国立美術館。

日付：2017年9月22日（金）

訪問先：保存センター作業室

訪問者：ワシントン・ナショナルギャラリー、写真部門アソシエイト・キュレーターおよび関係者計4名

8.1.6.5. 広島平和記念資料館

広島平和記念資料館は、広島平和記念公園に所在。「広島平和記念都市建設法」に基づき建設された原爆被災資料を収集・保存・展示する施設。

日付：2018年3月14日（水）・15日（木）

訪問先：保存センター作業室・相模原フィルムセンターフィルム収蔵庫

訪問者：広島平和記念資料館学芸員ほか計2名

中川 裕美（調査員）

8.2. 「日本写真保存センター」大阪セミナー

8.2.1. セミナー概要

- セミナー名：「日本写真保存センター」大阪セミナー

写真フィルムを長期保存するには… — 講演と包材のデモンストレーション —

- 開催日時：2017年10月20日（金）14:00～16:30
- 開催場所：メットライフ本町スクエア（旧大阪丸紅ビル）B1 会議室（大阪）
- セミナー内容：

皆さまが撮られてきた数多くの写真フィルムが、知らぬ間に劣化が進み使用できないまでにダメージを受けている。

「日本写真保存センター」では2007年から、文化庁の委嘱を受けて「写真フィルムの保存・活用」と「文化関係資料のアーカイブの構築」に関する調査研究を行っている。

これまで最も一般的に使われてきたTAC（トリアセテートセルロース）フィルムの劣化現象のひとつに、ビネガーシンドロームと呼ばれるフィルムベースの加水分解による劣化がある。

フィルムは高温、高湿度の環境に長く置かれたままだと約10年で劣化が起こり、使用できなくなる。対策としては、低温、低湿度の場所に移して、フィルムが納まっている包材を中性紙のものに交換することが必要だ。

本セミナーでは、写真原板の適切な保存について保存科学の専門家にご説明をいただき、あわせて包材メーカーによる写真関連の包材展示を行った。展示では包材を実際に手に取ってご覧いただいた。

- 講演内容：
- 1. 「写真・映像資料の保存—国立民俗学博物館での取り組み」 講師：園田直子（国立民俗学博物館教授）
- 2. 「日本写真保存センターについて」 講師：松本徳彦（公益社団法人日本写真家協会副会長）
- 3. 「日本写真保存センターの保存対策」 講師：中川裕美（日本写真保存センター調査員）
- 4. 「保存に適した包材のデモンストレーション」5社

(株)コスモスインターナショナル、(株)資料保存器材、(株)TTトレーディング(旧社名 特種紙商事(株))
PGI、ラーソン・ジュール・ニッポン(株)

8.2.2. セミナーまとめ

日本写真保存センターでは2011年から東京で毎年1回以上セミナーを開催している。近年のセミナーのアンケートでは「関西でも保存に関するセミナーを開催して欲しい」とのご意見をいただくことが多くなってきた。東京でのセミナーの準備、開催、片付けに慣れて余裕ができるようになったので大阪でもセミナーを行うことにした。

講演内容は関西から要望が多かった写真資料の保存方法について、国立民俗学博物館や日本写真保存センターの環境・実例を交えて紹介した。講師は国立民族学博物館教授の園田直子氏を迎え、日本写真保存センターからは松本と中川が講演を行った。質疑応答では予定時間を過ぎても質問の手が挙がり、写真原板の保存に対する聴講者の熱意が伝わってきた。

保存に適した包材のデモンストレーションでは写真資料を長期保存するための包材について、包材研究グループ5社による製品の展示及び説明を行った。会場内に設営した包材各社の展示ブースは講演中を除いて常に人が溢れていた。

8.2.3. 聴講者アンケート結果

アンケート調査では講演内容について「よかった」と答えた方が8割以上だった。アンケートの意見では名古屋、福岡などで保存センターのセミナーを開催して欲しいとの要望があり、今後開催を検討する。

アンケートの調査結果の詳細は割愛するが、特徴的な部分を下記に記述する。

8.2.3.1. 聴講者の内訳(セミナースタッフを除く)

写真家	14名
写真関係企業・団体	8名
公的機関・大学	11名
放送・新聞	1名
印刷・出版	2名
その他企業	14名
未記入	23名
計 73名	

8.2.3.2. 聴講者の内訳(セミナースタッフを除く)

1) 住所

近畿地方(大阪府52.4%、京都府、奈良県、兵庫県)が82.5%を占めた。

遠方からは鹿児島県、神奈川県から各1名参加していた。

2) セミナーの情報入手元

近年行ったセミナーと同じようにJPSからの案内(メール、郵便物)が40.9%と一番多かった。次いでチラシ(18.2%)、知人からの紹介(12.1%)となった。

今回のセミナーは読売新聞の紙面で紹介されたこともあり、それで知られた方も多かった。

3) 参加目的

所属先のアーカイブのため(36.2%)、自分や家族のアーカイブのため(36.2%)、研究(14.5%)が上位を占めた。

写真原板のアーカイブ化に困っている方が多いことがわかった。

4) セミナー講演評価

よかった(82.5%)、ふつう(7.9%)、満足できなかった(1.6%)、未回答(7.9%)と高評価を得られた。

アンケートの回答では「専門的なことだけでなく、個人でもできる保存方法の紹介もありよかった」という声が多かった。

5) 包材デモンストレーション評価

よかった(73.0%)、ふつう(12.7%)、満足できなかった(0%)、未回答(14.3%)と高評価を得られた。

前回の東京セミナーと同様に「現物の包材を見ることができてよかった」との意見が多かった。

6) 写真原板のデジタルアーカイブ化

行っている(57.1%)、行っていない(34.9%)となった。

行っていると答えた方の手法は次に記す。

7) 画像保存メディア、ストレージ

PC/HDD(55.8%)、BD/DVD(20.9%)、LAN上のサーバー(11.6%)が多かった。特に外付けのHDDで保存している方が多かった。

8) 困っていること

原板資料が未整理(24.3%)、長期保存の為に包材(20.7%)、バックアップ方法(13.5%)、画像のデジタル化(12.6%)と回答が多かった。アーカイブシステムの構築や、包材の費用で困っているとの回答もあった。

9) 今後の対応

システムの構築(46.7%)、専門家に相談(20.0%)と写真原板のアーカイブに向けて動こうとしている方が多かった。

笛木 諭(調査員)

8.3. 「日本写真保存センター」セミナー

8.3.1. セミナー概要

- セミナー名: page2018オープンイベント 「日本写真保存センター」セミナー
「劣化したフィルムへの対策—あなたのフィルムは大丈夫ですか!」
- 開催日時: 2018年2月7日(水)13:30~16:30
- 開催場所: 池袋サンシャインシティ文化会館7階710会議室
- セミナー内容:

わが国の高温多湿という気象条件は、フィルムの保存には適していない。郷土資料館や文書館などに寄贈されたフィルムでも、長期に保存するにはとても厳しい環境で保存されているのが現状である。いまそのような環境で保存された、日々の暮らしや歴史的な出来事を撮影、記録したフィルムから「酸っぱいお酢の匂い」が出てきます。これが「ビネガーシンドローム」と言われるフィルムの劣化現象のスタートです。劣化の初期は匂いだけです。進行するとフィルムが丸くなり、またボロボロに劣化するとフィルム上の画像が二度と見られなくなります。

日本写真保存センターでは、歴史的・文化的な価値を有する写真原板の劣化を防ぎ、貴重な記録を後世に遺す為、長期保存に適した包材に入れ替え、低温低湿の収蔵センターに収めています。本セミナーでは、「ビネガーシンドローム」になってしまった60年前に撮影された白黒フィルムから「遙かなる遠山郷」を制作した塚原琢哉氏より作家としての解決策を紹介頂きました。また日本写真保存センターの収集、調査、デジタル化、保存、公開についての一連作業を調査員が説明しました。また、セミナー会場後方に資料保存関係5社のブースを設け、フィルムを長期保存するための包材(保存容器)を展示した。

■ 講演のテーマ：

1. 「ダメージを受けたネガ」から再生したプリントまでの手法
講師：塚原琢哉 (写真家)
2. 「日本写真保存センターの保存作業紹介」
講師：笛木論 (日本写真保存センター調査員)
3. 「保存に適した包材のデモンストレーション」5社
(株)コスモスインターナショナル、(株)資料保存器材、(株)TTトレーディング (旧社名 特種紙商事 (株))
PGI、ラーソン・ジュール・ニッポン (株)

8.3.2. セミナーまとめ

page開催時期に行う当セミナーも6回目となった。今回のセミナーはビネガーシンドロームを起こしてしまった白黒フィルムから作品を1年かけて蘇らせた事例を写真家の立場から塚原琢哉氏 (写真家) が講演。次に日本写真保存センターの保存作業について笛木論氏 (保存センター調査員) が写真原板の収集から保存までのプロセスを詳細に講演。包材研究グループのメンバー 5社も自社の製品の展示ブースを会場後方に設け、包材の説明や各種関連の相談に対応した。

セミナーの準備、会場の設営、撤収は過去の開催経験が生かされスムーズに進行出来た。セミナーの申し込み受付を今回初めて主にWebとしたが、混乱もなく受付登録は進行出来た。昨年のFAX申し込みに比べ当日の欠席者がやや多い傾向が見られた。

今回の来場者数はセミナー関係者20名、聴講者47名の合計67名であった。配布物については、レジュメ・アンケート用紙に加え、内容をリニューアルした「日本写真保存センターの活動と写真原板の保存」という当センターの活動をわかりやすく説明したカラー画像中心のA4版4ページのPRパンフレットを来場者全員に配布した。

各講演の後に10分間の質問時間を設けた。質問の内容は写真原板の収集基準・劣化原板の保存方法や保存の基準、カビの発生したフィルムの処理方法等の多くの質問が出て、特に保存に関する質問が目立った。

8.3.3. 聴講者アンケート結果

本セミナーの聴講者に対するアンケートを実施したので、その結果を報告する。

1) 聴講者 (受付記帳名簿) の内訳

聴講者人数47名の内訳と関係者20名

JPS・会員写真家	5名 (10%)
写真事務所	5名 (10%)
公的機関・大学	4名 (9%)
放送・新聞	8名 (17%)
印刷・出版	1名 (2%)
その他企業	9名 (20%)
所属未記入	15名 (32%)
合計	47名
(他にセミナー関係者)	20名
参加者総計	67名

2) アンケート分析

昨年と同一内容でセミナー聴講者に対してアンケート調査を実施した。アンケートの有効回答数は33名。講演内容は違うが参考として数値比較する。(左側がpage2017→右側がpage2018の%数値)

① 参加者の住所(都道府県)

東京50%→49%、神奈川18%→24%、千葉3%→3%、埼玉3%→3%、大阪3%→3%、無記入を含めた1都4県で79%を占めた。

昨年は遠方の青森県、福岡県から各1名、兵庫県、岡山県から各2名の参加だが本年記入されている中での遠方は大阪から1名が参加していた。

② セミナーの情報入手元

JPSからの案内(メール)が33%→52%、知人からの紹介が26%→18%を占め、チラシ11%→9%、JPS保存センターHPが7%→21%とWeb記事やメール比率が増加した。

③ 参加目的

研究(30%→21%)、所属先のアーカイブのため(29%→39%)、自分あるいは家族のアーカイブのため(18%→25%)となっている。

講演参加者の個人比率が高く、写真原板保存を個人で取り組もうとしている。

④ セミナー講演の評価

よかった(72%→55%)、ふつう(14%→18%)、満足できなかった(2%→27%)、無回答(12%→0%)という結果。前回のセミナーよりやや評価がやや下がったが、反面、保存の基本を理解したい参加層にはよく理解出来たとの記載も有った。

⑤ 包材デモ評価

よかった(51%→76%)、ふつう(26%→24%)、満足できなかった(0%→0%)、無回答(23%→0%) 展示スペースで現品を手に取りながら、包材専門のプロから話が聞け、質問もその場で出来たので高い評価となった。

⑥ デジタルアーカイブ化

している(42%→58%)、していない(35%→24%)、無回答(23%→18%)

アーカイブ化は昨年より進んでおり、個人参加者でも必要性が上がっている。

⑦ 画像保管先

PC/HDD(28%→39%)、BD/DVD(10%→3%)、LAN上サーバー・クラウドサーバー(10%→18%)となっている。

クラウドサーバーが増える傾向、今回個人レベル参加が多いのでPC保存も高い比率。

⑧ 困っていること

未整理(15%→24%)が多く、次にデータバックアップ、デジタル化の方法、アーカイブの維持メンテのトータルが(30%→35%)で今後のシステム運用やメンテナンスで困っており、セキュリティー対策(10%→15%)も問題意識が高くなっている。

⑨ セミナーを聞いて今後どのようにしてゆくか

システムの構築(28%→33%)、システムの変更(7%→12%)となっており、デジタルデータを使った原板保存の作業を検討している方が増加傾向とを感じる。保存センターでもWeb公開画像のコンテンツを増加させ、閲覧ユーザーに写真原板保存の重要性を継続的にアピールして行きたい。

小泉 洋一(事務局長)

9. 支援組織

保存センターの活動を振り返ると大きな変化が過去に3回有ります。第1回は、文化庁の委嘱事業「我が国の写真フィルムの保存・活用に関する調査研究」が始まった2007(平成19)年、第2回は「東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館」に保存センター収集の写真原板を収蔵出来る事になった2012(平成24)年、第3回は写真原板の調査研究をサポートする支援団体の組織を立ち上げた2014(平成26)年です。

支援組織は今年度で4年目に入りましたが、支援組織の設立から現在までの経過と支援組織の現状について説明します。

9.1. 保存センターと支援組織について

保存センターは、日本の文化・歴史等が記録された写真原板を後世に残すために、原板の調査、収集、長期保存、アーカイブ化とその原板画像の活用を行っています。2001(平成13)年「社団法人日本写真家協会」内に設立基金を設けたことに始まり、具体的な活動の開始は、2007(平成19)年スタートの「我が国の写真フィルムの保存・活用に関する調査研究」、その後2011(平成23)年からは「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」を文化庁から継続して委嘱を受けています。そして「日本写真保存センター」の活動は、文化庁の調査研究事業委嘱が基本となり、これに東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館への収蔵や支援組織の立ち上げを経て事業を拡充させることが可能となりました。

支援組織とは「日本写真保存センターの事業活動に賛同して活動を支援するための組織」であり、その支援組織を立ち上げる前段階に、公益社団法人日本写真家協会、キヤノン株式会社、株式会社ニコン、富士フイルム株式会社の1団体3社で支援組織の役割や支援内容をまとめました。そして公益社団法人日本写真家協会の賛助会社を中心に支援組織会員への参加を呼びかけた結果、賛助会社として写真や印刷に関連する企業からの賛同が頂け、さらに写真原板の保存に関する意義や知識もあり、保存センターの活動に対して理解も得やすかった。(以後はキヤノン、ニコン、富士フイルムと略称表記)2014年の初年度は12社が支援組織の会員としてスタートし、2017年度では12社1団体の13会員となりました。

9.2. 支援組織の経緯について

- 2013年06月 支援組織準備の3社(キヤノン、ニコン、富士フイルム)と協議
- 2014年01月 支援組織立ち上げ及び保存センター実務責任者をキヤノンから派遣
- 2014年05月 公益社団法人日本写真家協会の賛助会員に説明会実施
- 2014年10月 支援組織会社12社による初の「支援組織会議」を開催
- 2015年04月 支援組織が14会員となる(1社・1団体が増)
- 2015年08月 「原爆展」(展示:JCIIサロン)に支援会社が協賛
- 2016年04月 支援組織が13会員となる(1社が減)
- 2016年11月 「渡辺義雄展」(展示:ポートレートギャラリー)に支援会社が協賛
- 2017年03月 保存センター実務責任者が支援会社のニコンから着任し責任者交代
- 2017年06月 「東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館」見学会に支援会社3社(キヤノン、ニコン、富士フイルム)から10名参加
- 2018年03月 「後世に遺したい写真」(展示:みなとみらいギャラリー)に支援団体が協賛
4日間の写真展開催に約7,000名が来場した

9.3. 支援組織の支援内容について

支援組織から「日本写真保存センター」への具体的な支援内容は、事業運営に必要な資金・要員の安定的確保のための支援と、事業内容の啓蒙活動に対する支援の2つであり、以下に詳細を記載します。

① 事業運営に必要な資金・要員の安定的確保のための支援

保存センターに必要な事業費の大半は、文化庁からの委嘱の範囲で賄っているが、保存センターの活動が拡大している現在では資金不足も拡大しています。

そこで支援組織が保存センターに資金の支援を行い、これにより保存センターの事業が継続的に活動出来ています。支援組織からの資金は、主に物品購入や人件費など必要経費の一部に補てんされています。

また支援組織の3社(キヤノン、ニコン、富士フイルム)については、事業運営に必要な要員の支援も行います。具体的には支援組織会員会社のうち1社から常勤の業務管理者(事務局長担当)1名を日本写真保存センターへ派遣し、保存センターの業務を手助けしています。過去の実績として、キヤノンから1名2014年1月から2017年4月まで派遣されました。2017年3月からはニコンより3年の予定で常勤の業務管理者が派遣され、保存センターの事務局長として日常の管理業務を中心に勤務しています。

② 事業内容の啓蒙活動に対するサポート

先にも述べましたが保存センターの活動は、写真原板の調査、収集、長期保存、アーカイブ化とその原板データの活用です。

特に「フィルムベースの写真原板」については、「ピネガーシンドローム」といわれる高温多湿により発生するフィルムベースの加水分解による劣化によりフィルムに記録された画像が破壊され、貴重な記録が消えてしまう事が近年多く発生しています。そのため写真原板の調査、収集、保存の作業を迅速に進める必要が有ります。そこで「写真原板の保存と活用に関する啓蒙活動」が必要です。保存センターの原板調査、収集、長期保存、アーカイブ化の活動を積極的に外部に紹介して、保存活動を通じて国内の歴史的文化的価値のある写真原板が保存される活動を実施しています。また日本写真保存センターの情報発信、保存啓蒙活動は保存センターだけでなく、同じ価値観を共有する支援組織会員も協力して、積極的に活動していくことも重要です。本年度は支援会社に保存をより深く理解頂くため、写真原板を保存している、「フィルムセンター相模原分館の見学会」を開催致しました。

また具体的活動には、保存セミナーの開催、写真展の開催、各種PR印刷物の発行、WebサイトでのPR等で、保存に関するイベントや啓蒙活動に対しても、支援会員が協賛など積極的に協力いただいています。本年度3月1日から4日まで、CP+2018連動の「後世に遺したい写真」写真展では、保存センターに収集された30万点の写真原板から1920年代から現代までのドキュメンタリー写真、日本の暮らしぶりの記録写真などを展示して、約7,000名の来場者が訪れました。支援団体からも支援を頂き、保存の重要性や保存活動のパネル展示も設置され、写真展だけでなく保存センターの活動を一般の来場者にも大きくアピール出来たイベントを開催しました。

今後は支援組織会員を増加させ活動も拡大したいが、原板保存の支援活動という沢山の原板に対して作業を促進させる為の、ボランティア要員の確保も必要です。一般団体や個人からの寄付等についても受け取り方や募集方法など検討も進めています。

9.4. 支援組織の概要について

保存センターが行っている歴史的、文化的な写真原板の調査、収集、保存、アーカイブ活動の促進や啓蒙活動を充実させるために支援組織を設立して、保存センターはその活動に必要な要員派遣を支援会員会社に依頼出来る。保存センターの経費の一部を補てんするために支援組織から会費を徴収する。

支援組織会員の募集要項

- 要員派遣：キヤノン、ニコン、富士フイルムの3社のうち1社から1名を順次「日本写真保存センター」に派遣する。
2017年3月にキヤノンからニコンに交代済み。
- 会費：数十万円/年(毎年4月から翌年3月までの年会費)
- 会議：2回/年(毎年4月/10月下旬を予定)

支援組織会員(平成30年3月時点 12社・1団体の13会員)

株式会社アイデム
エプソン販売株式会社
オリンパス株式会社
株式会社キタムラ
キヤノン株式会社
株式会社シグマ
株式会社写真弘社
株式会社タムロン
凸版印刷株式会社
株式会社ニコン
一般社団法人日本写真著作権協会
富士フイルムイメージングシステムズ株式会社
株式会社フレイムマン
(50音順)

小泉 洋一(事務局長)

10. まとめ

本年度受け入れた「岩波書店」刊行の『奈良六大寺大観』『大和古寺大観』の約3万6千枚に及ぶ膨大な写真原板の所在確認および整理作業を進めている。

原板はいずれもわが国を代表する寺院の建築や彫刻、絵画、工芸、書跡など国宝や重要文化財に指定された文化財を記録した貴重なものばかりである。

さらにこれらを撮影されたのが渡辺義雄、入江泰吉、坂本万七、小川光三（飛鳥園）、辻本米三郎（便利堂）、米田太三郎（東京国立博物館）、永野太造、藺部澄など、仏教美術、文化財撮影の最高メンバーが関わったものとして貴重である。と同時に当写真保存センターにとっても最重要な写真原板として位置づけ、原板の保存、管理には細心の注意を払っている。

写真愛好家が連日多数訪れたフォトイメージングショー CP⁺（平成30年3月開催）で、日本写真家協会が催した写真展「後世に遺したい写真」に4日間で約7千人もの入場者があった。この催しは当保存センターが収集してきた写真原板から、明治大正期から平成に至る日本人の暮らしを写した写真約100点をプリントして展示した。これは当センターの活動状況を多くの人たちに知って頂き協力を仰ぐと計画したもので、成果は見事に当たり「写真の記録性」「写真原板の保存の必要性」を端的に示す内容であった。言ってみれば「写真」が如何に人々の記憶を甦らせ、また初めてみる、知る機会を得た人たちの心を揺るがせ、喜びを感得した瞬間でもあった。写真が100万言の記事を凌駕する訴求力があるといわれる所以である。

文化庁委嘱による「写真原板の収集・保存」をはじめ10年余、保存センターの活動が次第に世間に知られるようになって、遺族や関係者から収集を希望される方が増え、収集する写真の質的な向上、量的な増大が見られる一方で、調査に係る人員の確保や必要経費不足に悲鳴を上げている。

写真資料にとって最も大事な撮影日や場所、主題（テーマ）に関する情報の記述が明確でなく、公開に向けての活動に支障が出ている。さらに高温多湿の保存環境では、フィルムの劣化を予防することが困難で、中性紙等の包材への交換が遅れ劣化が進んでいることも心配である。

センターが主催する保存資材の研究セミナーには、地域の資料館や図書館、企業などの保存施設からの聴講や見学なども増えており、フィルムの長期保存についての関心は高まっている。

写真アーカイブの構築および閲覧検索機能の充実も行っているが、画像やメタデータの入力に追いつかず、いまだ検索可能な画像が5千コマ程度と遅れている。来年度中に約1万点を目指している。

松本 徳彦（公益社団法人 日本写真家協会副会長）

新規受け入れ作家の作品



笹本恒子 浅草 女性を招待したストリップショー



笹本恒子 銀座4丁目とP.X.



常盤とよ子 赤線地帯 検診風景



笹本恒子 両国 女性連れの進駐軍兵士と幕下力士



諸河久 都電 渋谷駅前首都高速3号線の工事中



諸河久 都電 鐵砲洲稻荷の祭礼

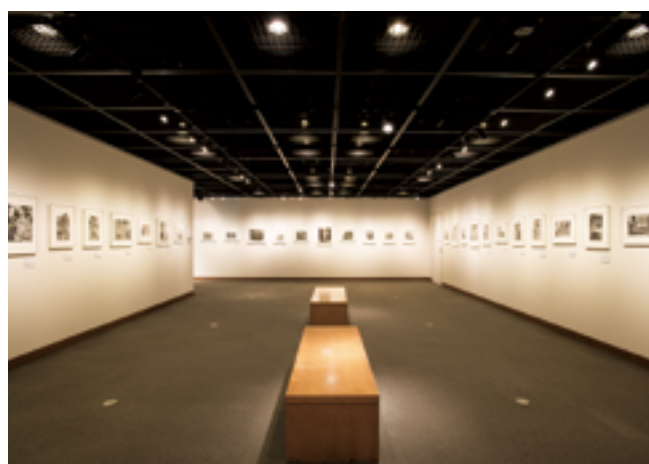
CP+写真展「後世に遺したい写真」



展示風景



展示室A



展示室B



展示室C



CP+セミナー

page2018



劣化原板について解説する塚原氏



保存センターの活動を説明する笹木氏

大阪包材セミナー



関西で初めての保存セミナー



包材のデモンストレーション

禁無断転載

平成29年度 文化庁
「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」
報告書

平成30年3月 公益社団法人日本写真家協会
〒102-0082 東京都千代田区一番町25 JCIIビル
TEL:03-3265-7451 FAX:03-3265-7460
<http://www.jps.gr.jp>
E-mail: info@jps.gr.jp